返却を希望します

なお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
返却を希望します

【Ｎコード】
Ｎ５６３２Ｒ

【作者名】
なお

【あらすじ】
異世界から女の子がやってきた！
異世界から人がやってきて紆余曲折を経てハッピーエンド。本当にハッピーエンド？　わたしの存在意義がなくなっちゃったよ。
■２０１１．０３．０９　全編手直し。ストーリーは変わってません！

00

わたしはずっと皇太子殿下の妻となるべく教育されてきた。
生まれてこの方二十六年、ずっと皇太子妃の第一候補だった。とっくに薹が立っているけれど、幼馴染で二歳年下の皇太子殿下との仲は本当の恋仲だと言い難いけれど、一番身近な女子である自信はあったから、いつか殿下の妻になるんだろうなと思っていた。そのことに不満はなかったし、皇太子妃としてふさわしくあるようにとあらゆる面の努力を惜しまずに過ごしてきたつもり。政治のことだって、文化的なことだって、自分の容姿にかかわることだって、これまで手を抜いたことなんてなかった。

それが起きた時、昔聞いた話を思い出した。
でも、わたしの未来に影響を及ぼすなんて微塵も思ってなかった。
その後、少しだけ殿下と疎遠になっていって、気がついたら三ヶ月後、わたしの二十六年は意味のないものになった。

01　お庭に女の子

その日、わたしは侍女のアリスとともに殿下にお会いするために王城へ行っていた。旅人の関税に関する嘆願書とやらを、父が殿下に届ける予定だったものをわたしに押しつけたことがきっかけだった。

わたしは二十六歳で、とっくに婚期を逃している。だいたいの貴族の娘は十六で社交界にデビューして、遅くとも二十歳には嫁ぐのだ。二十六歳にもなったら嫁ぐことは難しいと誰もが思うだろう。その反面、男性の婚期は遅く、三十歳で未婚と言ってもそれほどおかしいと思われないのだ。結婚に関して女性の肩身は狭い。

そんな娘を抱えた父はいつからか、娘が嫁に行けなかったらと焦り出し、事あるごとにわたしと殿下を会わせようよしていた。

わたしはいつか殿下の妻となると漠然と考えていたし、殿下に女性の影――もちろん男性の影も――がなかったから、ちっとも焦っていなかったけれど、殿下には会いたかったし、父の気持ちもありがたかったから、ありがたくその機会を利用していた。

「ソフィア・ムーレ様がお越しです」

殿下の執務室の扉の脇にいる兵がわたしの来訪を中に伝えると「入れ」と短い返事がした。扉の脇にいる兵が扉を開けてくれたので部屋に入った。

未婚の女性が男性と二人きりで部屋で過ごすことは道徳的に良くないこと「淑女のモラル」という、未婚女性のためのマナー本――この本はわたしの愛読書の一つ――に書いてあった。とっくに薹が

立っているわたしも例外ではないようで、アリスも一緒に部屋に入った。そのアリスは殿下を見つめて蕩けるような表情を浮かべている。

それもそのはず。

殿下はこの王城から城下町、辺境の村に至るまでの娘たちの心を掴んで離さないのだ。太陽の光を受けるとキラキラと輝く金色の髪に、空色の瞳はいつも柔らかい光をたたえている。その外見も人気の一つではあろうが、気さくな性格も大きな人気の一つだ。そんな彼の妻になることができると思うと、誇らしい気持ちになる。

「こんにちわ、殿下。今日は父からこれを預かってまいりました」

「ああ、嘆願書だな。シリルから昨日のうちに聞いている」

シリルと言うのはわたしの父のことで、父は殿下の仕事の指南役をしている。

わたしの父はこの国でも高い地位の大貴族の一人なのだ。

「そんな手順を踏んでいるなら、父が持ってくればよかったのに」

心から思っているわけではないけれどついつい憎まれ口を叩いてしまう。

「まあ、そんなことを言ってやるな。ソフィーが持ってきた方が花があっていいだろ？　休憩だ、庭でお茶でも飲もう」

殿下の執務室の大きな窓からすぐ庭に出ることができる。そこでわたしたちはよくお茶をする。お茶の時間はわたしたちはただの幼馴染に戻るのだ。

「こないだ、十三桁の計算の確認をしてたんだけど、見事に繰り上がりが間違っていたんだ。書類全部ね！　直すのに一晩かかった時は何かの嫌がらせかと思ったね」
「あら、リュドは計算が苦手じゃなかった？　リュドの確認が間違っていたりして」

リュドと言うのは、このオーランシュ王国の第一皇子、リュドヴィック・オーランシュ・ジルベルスタイン殿下の愛称だ。わたしはこの気楽な時間だけ彼を愛称で呼ぶことにしている。きっと本人はいつだってリュドと呼ぶことを嫌がらないだろうけれど、けじめは大事だと「淑女のモラル」に書いてあった。

「ソフィーは計算が得意だったよな。ああ！　そうか。ソフィーに頼もう、今度からは」

ねぎらいの言葉のないわたしに、リュドも言い返す。

「わたしだったら、一晩はかからないわね」

軽口を言いあって、笑い合っていた。いつも穏やかなこの時間がわたしは大好きだ。

その時、突然まばゆい光が庭を包んで辺りが真っ白になった。わたしは驚いてギュッと目を瞑った。次に目を開けた時には殿下の近衛隊がわたしたちを守るように取り囲んで、ある一点をじっと見つめていた。

その方向へ、わたしも目を向ける。

そこには茶色い髪に黒い眼をした女の子が不思議な服を着て佇んでいた。

「えええええ！！！　こ、ここ、どこおおおおおおおおお！？？？？？？？？」

その女の子は濃紺の大きな襟がついてて、胸元が逆三角形に大きくあいた上着に、同色の膝頭が露わになるほど短いプリーツのよったスカートを着ていて、何度も大きな声で同じことを叫んでいた。

女性が大きな声を出すことは「淑女のモラル」には良くないことだって書いてあったけれど、と場違いなことを考えてしまった。

「そなたは何者だ」

この状況ですぐに理性を取り戻したのはリュドだった。近衛兵から剣を受け取り、いつでも抜けるように柄を握りしめながら近寄っていく。

「わわわ、わたしは浅井唯愛（あざいいちか）で、です。言葉通じるの？　だって、めっちゃ顔が外人なのに！！」

「アザイーチカ？　何を企んでいる。どこの国の者だ」

「どこの国って、ニホンだよ！　ニホン！　知らないの？」

アザイーチカという女の子が視線を彷徨わせる。彼女をじっと見ていたわたしと目があう。

「ね、ねえ、ここどこなの？」

助けを求めるように、すがる様な眼差しでそう言うアザイーチカの目には涙まで浮かんでいる。けれど、リュドの命を狙う者だとしたらと考えると迂闊に手を差し伸べることもできない。

「ここはオーランシュ王国の王城だ。ニホンなどと言う国はこの世界にはないぞ」
リュドが冷静に言う。するとアザイーチカはさらにさらに困惑し辺りを見回す。
「だ、だって、わたし、ガッコーから帰る途中で転びそうになったと思ったらここにいて、だって、別にそんななにも、あなたのことだって知らないし、うちに帰りたいだけなのに、なんでなんで」
大きな黒い目に涙が溢れてくる。これが演技だとしたら、人間を信じられなくなりそう。さすがのリュドもこの子が害意を持ってるとは思わなかったようで、彼も困っているようだ。
「ね、リュド。もしかして、ほら。異世界から引っ張られたんじゃない？　昔、リュドのおばあ様がお話して下さったでしょ。あなたのおばあ様のお友だちのお兄様のお嫁様が異世界から来た方だったって言っていたでしょ。そういうことなんじゃないかしら。
アザイーチカさん、はじめまして。わたしは、ソフィアよ。あのね、ここはあなたの住んでいた世界とは違うの。ごくたまに、異世界の人間が別の世界に引っ張られて、召喚されてしまうことがあるの。ここはオーランシュと言う国よ。この世界、リプリマンディーにはニホンと言う国は存在しないの。それに、この世界のどこを探してもあなたのような服を着ている人間は存在しないと思うわ。だからこそ、あなたは異世界に来てしまったんだと思うわ」
リュドの隣に立ってアザイーチカに話しかける。現実を突き付けられると辛いかもしれない、でもそうじゃなければ彼女はずっと辛いはずだ。
「え……。異世界？　なんで、わたしが？　帰りたいよ、お、おかあさん」

そう言うと彼女は小さな子どものように泣き出してしまった。

「急いで、父上に異世界人が現れたことを伝えに行け。それから、彼女に部屋を用意してやれ。彼女は休む必要がある」

彼女は王城に部屋を与えられることとなり、これがアザイーチカとの出会いだった。

02　女の子とお勉強

アザイーチカがこちらへやってきてから、毎日泣いて暮らしていると聞いたのは、あの出会いから一週間後のリュドとのお茶の時間だった。リュドのことだから自分の世界から望まずにこちらの世界に来ることになってしまった憐れな女の子に心を配っているんだろうと思ったけれど、リュドまで落ち込んでいる姿を見るとわたしまで不安になってしまう。

「そうそう、彼女の名前なんだけれど、イチカと言うそうだよ。昨晩、怒られたんだ。唯一の愛と言う大事な意味があるそうだ。きっと両親に大切に育てられたに違いない」

「そう。ステキな名前を送ってくださる両親がいたのね。彼女はどう過ごしているの？」

「侍女を付けている。出歩くのも自由だと言っているから、たまに庭に散歩に出ているようだけど、与えた部屋で沈んでいることが多いそうだ。まだ、落ち着いていないから自害したりしないように常に人を付けているよ。時間がある時はオレも会いに行ってる」

「わたしも会って、お話したいわ。だって女同士の方が話せることも多いのよ？　わかるでしょ？」

そんなこと思いもつかなかったという様子でリュドが納得する。二十四歳になってもまだまだ女性に対する心配りは未熟よね。もう。

「じゃあ、これから一緒に行ってみようか」

「あら？　リュドも行くの？　お仕事放棄かしら」

わたしの軽口にリュドは乗らなかった。

「違うよ。いつも泣きはらした顔ばかりしているから気になるんだ」

真面目腐った顔をして言った。

「はじめまして、ではないんだけれど、わたしのこと覚えていらっしゃる？」

彼女の部屋に入った時、彼女は窓辺に椅子を移動させて、そこに腰かけ窓の外を眺めていた。声をかけると緩慢な動作でこちらに視線を向ける。

「あ、あの時のお姫様」

そうポツリと呟く。もうお姫様と言う年ではないから苦笑が漏れてしまった。

「そう言ってくれるのはとても嬉しいのだけれど、お姫様と言うには年を取りすぎているの。わたしはソフィアよ。みんなはソフィーと呼んでいるわ。あなたのことはなんてお呼びしたらいいかしら？」

傷づいた小動物を思わせる彼女に柔らかな微笑を保って近づく。

「淑女のモラル」に書いてあったのだ、手負いの動物は警戒心が強いから、まず安全を伝えることが大切って！

「わたしはイチカ・アザイです。唯愛って呼んでください」

自分の名前を伝えるときに何かを思い出したのだろう、笑顔を作ろうとしたその顔がくしゃりと歪む。

「いつも泣いて沈んでいるとそこの彼が仰っていたから、気晴らし

になればと思って押しかけてみたのだけれど。お茶をご一緒しても？」

侍女たちにお茶の支度をさせてわたしたちは部屋の中央にある応接セットに座る。わたしの向かいに唯愛、わたしの横にはリュド。彼女は未だに警戒しているようだから、優しくしてあげなくちゃと母性なのか庇護欲なのかが俄かに沸いてきた。

「こちらの服もよく似合っているわね、とてもかわいいわ。そのピンクはあなたに良く似合っているわね」

「あ、ありがとうございます」

一度私の声に目線をあげたが一言そう呟いたきり黙ってしまった。女の子なら容姿を褒めれば喜ぶと思っていたけれど、唯愛はそれには当てはまらないようだ。

「そうそう、こちらの世界で困ったことはない？　食べ物とか、水があわないとか……」

世界が違うということは国が違うということではないから当てはまらないだろうけれど、旅に出て困ることをいくつかあげてみる。

「いいえ、良くしてもらっています。食事や文化も少し似ているし、みんなが優しくしてくれているから、困ることなんてないんです」

「そう、よかったわ。毎日、どうしていらっしゃるの？　退屈ではない？」

「す、少しだけ。リュドが会いに来てくれる時以外はたいてい一人なんで、字の勉強をしています。会話は平気なのに文字は読めなくて。不思議ですよね」

文字が読めないという告白はリュドにも初耳だったようで、隣で驚いている様子が伝わってきた。

「お勉強されているのね」

そこでわたしはいいことを閃いた。リュドと会っている時以外一人で過ごしているのであればと思ったのだ。

「わかったわ。わたしが指南して差し上げるわ。一人でやるよりも効率もいいし、人と一緒にいれば、気も紛れると言うものよ。幸いわたしには差し迫った要件もないし」

わたしの提案に唯愛は目を輝かせた。だからやっぱり一人でさびしく過ごさせてはいけないと確信したけれど、隣に座っていたリュドはあまり乗り気ではないようだった。それをただの親切心の欠如と考えて、わたしは唯愛に笑顔を取り戻すことを第一目標として掲げることにしたのだ。

もし、わたしがもっと男女の男女の機微に敏ければリュドの心の変化に気付いたかもしれない。でも、わたしには生憎男女の機微を学ぶ機会などこれまでなかったし、頼みの綱の「淑女のモラル」にだってそんな変化を見つける手立てなど書いていなかったから気付くはずなかったのだ。

唯愛はよい生徒だった。飲み込みは早いし意欲も伝わってくる。わたしは文字だけではなく、こちらで生きていくために必要だと思われることを彼女に指導していた。テーブルマナーだとか、パーティーに出た時のふるまい方、もちろんダンスも。ダンスの練習には

リュドも参加して勉強というよりは楽しい時間となることが多かった。

リュドは唯愛の前ではただのリュドであって、皇太子として振舞わなかった。わたしはそれがたくさんの悪い可能性の芽をつぶす為だろうと考えていた。例えば、唯愛が某国の暗殺者で記憶をなくしていて、思い出したときにリュドが皇太子だとわからなければ少し時間を稼げるんじゃないかとか、唯愛がリュドの地位やこの王城での生活に欲を覚えないようにするためだとか。唯愛は素直な子だからそんなわけないと思っていてもリュドはこの国の皇太子だ。いろいろな事情を抱えているのだと考えていた。

「本当に、唯愛は飲み込みが早いわね。わたしも教え甲斐があるわ」

このところ、唯愛に笑顔が増えてきた。唯愛の指南役を買って出てから三週間が過ぎるころだ。彼女の書く文字はちょっぴり不格好だけれどかわいらしく、文章も随分と書けるようになっていた。これから、リュドに手紙を書くことになっている。日記を書いて文章力を付けると言う手もあったけれど手紙を書くことにしたのはわたしの提案だ。文章を書き、返事をもらったらそれを読む。文字を学ぶのにぴったりの手段だと思った。

それに、何かと唯愛の部屋に近づきたがり執務が疎かになっているリュドを唯愛の部屋から遠ざける目的もあった。リュドはわたしと唯愛が勉強していると執務を放り出してやってくるのだ。三人で過ごす時間は楽しかったのでリュドの気持ちもわかるのだけれど、執務が滞るのは問題だ。手紙を書くから部屋に近づかないという約束と、さらに手紙に丁寧な返信をするという約束を取り付けた。今頃、執務をしながら手紙を楽しみにしているだろうリュドを思うと可笑しな気持ちになる。なんだか唯愛が来てからリュドが生き生きしているように思う。楽しそうに笑うリュドを見るのはわたしも嬉しかった。

「ソフィーの教え方がうまいからだよ。わたし、元の世界にソフィーみたいな先生がいたらもっと勉強が好きだったと思う」

手紙を書いている唯愛が顔をあげて言う。唯愛は十八歳で自分の世界では学校に通っていたと言う。まず、十八歳と聞いて驚いた。てっきり十三歳くらいだと思っていたから。さらに、こちらの世界でも学校に通うことは国民の義務ではあるが、十二歳までだ。十八歳でも学校に通っているということは何か専門的なことを極めていたのかと驚いた。しかし彼女は、義務教育よりちょっとたけ高等な勉強をしていただけですと話し、勉強は苦手だと笑った。

「褒めても何も出ないわよ。んんん、そうね。お茶菓子をちょっと豪華にするくらいならできるかしら」

「本当のこと言っただけなのに。でも嬉しいな。こないだ食べた、ジェンミーってお菓子がまた食べたいな」

「えっと、あちらのチョコレイトに似ているんでしたっけ？」

「そう！　あれはもうチョコレートだよ。口の中で広がって溶けていく感じ。大好き！」

「はいはい、わかったわ。じゃあ、今日のお茶菓子はジェンミーで決まりね。さ、手紙ちゃんと書いてね」

唯愛は顔を綻ばせると手紙の続きを書き始めた。この素直なところがかわいいのだ。自分に妹がいたらこんな感じかしらと、唯愛を見つめる。可愛がって、いろんなことから守りたくなる。

「ねね、ソフィー。ここなんだけれど、これであってるかな？」

唯愛は手紙を指さし、気になっている文章をなぞっている。そこには『いつか正装でダンスを踊りたい』といったことが書かれてい

る。唯愛の可愛らしい夢に私もほほえましい気持ちになる。

「そうね。この単語の並び方は間違っているわね。この単語はここに来るのよ」

「ああ、そうだった！　昨日も注意されたところだよね。わたし、これ、苦手なのかも」

「大丈夫よ。苦手って気づいたなら、克服できるわ。気をつければいいのだもの。さ、頑張って書いてね。リュドが楽しみにしているわ」

その言葉に、唯愛の笑みが幸せそうに深くなってもわたしは何も気がつかなかった。

03　わたしに隠されたこと

唯愛の勉強を兼ねた、リュドとの文通から1週間。随分と文章力の上がった彼女はスラスラと手紙を書くようになった。今日もものの数分で手紙を書きあげ、その間、わたしに表現の仕方を尋ねることもなかった。

「ソフィー！　手紙書けたよ。ねね、次は、隣国の話がいいな」

ペンの走る音が止まったと思ったら笑顔で唯愛が顔をあげた。彼女はすっかり本を読むのも早くなっていて、わたしが指南することはテーブルマナーや、社会に関することに移行していった。唯愛に教えるということは知識の再確認にもなったし、なにより、いろんなことを積極的に学ぼうとする唯愛に応えるためにわたしの知識も増えていき、有意義な時間だった。

「そうねぇ。隣国と言えば、最近はストライフ国の動きが気になるわね」

「ストライフ国はオーランシュの東側にある内陸国だよね？　えっと、あまり賢い王がいるとは言えないんだっけ？」

「ええ。残念ながら。隣国の王は浪費家で、他国からの評価は低いわ。私利私欲のために政権を好き勝手にしているという印象ね。でも、一部の者がそれに立ちあがろうとしているの。もしかすると政権が変わるかもしれないわ。今の国王が悪いだけで、ストライフは歴史のある国だから、このまま国が崩壊しなことを願っているわ」

「ストライフの山側にある神殿がステキだって侍女さんたちが言ってたけどソフィーは行ったことある？」

唯愛が目を輝かせて身を乗り出してくる。隣国の政治のことより

も神殿が気になっていたということね。

「ああ、カーク神殿のことね。行ったことあるわよ。カーク神殿は長い歴史の割にロマンチックなエピソードが多いから縁結びの神殿としても有名なの。5年くらい前かしら、リュドとストライフに行った時に立ち寄ったわ」

「え？　それって……」

「周囲が早くしろってうるさかった時期だから、わたしたちがそういうムードになればいいと思ったんでしょうね。周囲の思惑通りにはならなかったけど、夕陽のさす神殿を見れたから満足しているわ」

あの時の景色を思い出すと温かい気持ちになる。

あの日、山道を必死に登ってカーク神殿にたどり着いたのは日が暮れるころだった。斜面の開けたところにある神殿から地上を見下ろしながら見る夕陽がとてもきれいだったのだ。白亜の神殿は夕陽が反射してオレンジ色に染まっていたが、日が暮れると共にどんどん色を赤く変えていき、とてもロマンチックだった。その夜、聖なる神殿に泊っていると言うのに、リュドとの仲が進展しないかと期待したのはわたしの胸の中だけにある秘密だ。彼とはいろいろな思い出があるけれど、この思い出はかけがえのないものの一つだ。

「ソフィーとリュドって、えっと……どんな関係なの？　そういえば、すごく仲がいいよね」

戸惑いを声に乗せて唯愛が聞いてくる。わたしたちの関係を彼女に打ち明けたことはなかった。故意に隠していたわけではないけれど、言うタイミングも必要もなかったというのが現状だろうか。

「ああ、そうだ。話してなかったわね、わたし、リュドの」

その時、タイミング良くノックの音が部屋に響いた。そしてまるでスキップでもしそうな勢いでリュドが部屋に入ってくる。この時間に彼がやってくるのは久しぶりだった。今日は随分と機嫌がいいようだけれど、なにかあったのかしら？

「どう？　勉強は進んでる？　お茶にしない？」

ご機嫌で部屋に入ってくるリュドのせいで唯愛にこたえるタイミングを逃してしまった。だけどまたの機会に話せばいいことだし、自分から進んで言うのも照れくさい。

「そうね。今日はもう手紙も書きあがっているものね。ストライフのことからカーク神殿の話まで飛躍していたし、たまには息抜きも大事だものね」

「カーク神殿の話？」

リュドの表情が曇る。唯愛もさっきまでの様子とは打って変わって沈んでいるように見える。

「ほら、昔一緒に行ったでしょ？　その時の話を」

「あああ！　そう言えば行ったね。でもカーク神殿より、黄金岬にある神殿の方がいいところだよ。よし、唯愛、そのうち連れってってやるからな！」

わたしの話を最後まで聞くこともなく話し出し、まるで取り繕うかのように言うリュドに仄かな違和感を覚える。カーク神殿にわたしたちが行ったことは誰もが知っていることだけれど、話してはいけなかったのだろうかと少し不安になった。

リュドに話しかけられて唯愛は戸惑ったように返事をしている。それでもリュドが黄金岬について話しているうちに笑顔が戻り、嬉

しそうに話を聞いていた。
唯愛に笑顔が戻るころにはわたしも黄金岬の良さについてリュドとともに熱弁を奮ってしまい、わたしたちの勢いに唯愛は苦笑いを浮かべていた。手のつけられていないお茶はすっかり冷たくなっている。

「二人がそんなに熱くなるってことは本当にステキなんだろうね。いいなぁ、わたし、まだ遠出ってしたことがないから」

唯愛が残念そうに言う。

「馬車に乗っていけば半日ね。馬で行けば三時間もかからないところだけれど、乗れないんだったかしら？」
「馬？　乗ったことないよ。友だちは乗馬クラブに通ってた子もいたけど、うちなんてそんな裕福じゃないもん。馬車はリュドがダメって言ってたし。なんでー？　セレブの癖に馬車には乗れないとか意味分かんないよ」

随分と拗ねたように言う様子を見て、出かけたいと訴えるのが初めてではないというのがうかがえた。確かに皇太子が馬車に乗って出かけるなんて一大事だ。護衛の問題もあるし。単騎で城を抜け出すなら可能かもしれないけれど。

「じゃあ、馬に乗れるようになりなよ。僕が教えてやってもいいよ。文字はもう完璧でしょ？　この時間を馬に乗る練習に変えてみたら？」

リュドも同じことに思い至ったらしい。

「え！　リュドが教えてくれるの！　やったー！！　じゃ、明日か

らだよ。絶対に、約束ね！」

唯愛の満面の笑みを見るとこちらまで嬉しくなってしまうから不思議。彼女は椅子から跳びあがって子どもみたいに喜んでいる。

「それじゃあ、しばらくお勉強会はお休みね。馬に乗れるようになったら手紙をちょうだいね？　そうしたらマナーについての勉強を再開することにしましょう。わたしは時々、ここに遊びに来るから忘れないでね？」

「もちろんだよ！　馬に乗れるようになったらソフィーの家まで遊びに行っちゃうよ」

喜ぶ唯愛を前に、わたしは少し前に感じた違和感など忘れてしまった。

乗馬の練習が始まってから、すっかり王城へ行く機会が減ってしまい、リュドにも唯愛にも会うことが減ってしまった。

唯愛の指南役を買って出たころからリュドと二人きりでお茶をすることがなくなったことを思い出し、何度かお茶に誘ったけれど、いつも唯愛も交えた三人でお茶をすることになっていた。その時は「あれ？」と違和感を覚えるのだけれど楽しい時間が過ぎる頃にはその違和感を忘れてしまう、の繰り返しだった。

「わたし、馬に乗るのすごくうまくなったんだよ！」

「トロットができるようになったくらいだろ。危なかしいったらないよ」

自信満々の唯愛にリュドが水を差す。乗馬の練習が始まってから

二週間くらい経っていた。
唯愛が嬉しそうに練習の話や身近で起きたことをしてくれる。すっかり、この世界での生活に慣れて唯愛も生き生きとしている。リュドも厳しいことを言っているが、目元が柔らかくなっていて、唯愛がこの世界に馴染んでいくのを喜んでいるのが伝わってきた。

「ソフィーも今度一緒に乗ろうね？」

そう言う唯愛にわたしは苦笑を浮かべる。リュドもやれやれといった表情を浮かべた。

「ああ、ソフィーは乗れないんだよ」
「え！」
「わたし、小さいころから馬に近づくとくしゃみが止まらなくなるの。だから馬車には乗るけれど、馬には必要に迫られた時にしか近づかないようにしているの」

乗馬はできる。淑女の嗜みでもあるし、私自身の命が狙われた時のこともあって教育は受けている。でも乗馬の授業のことは消してしまいたい思い出だ。いつも練習が終わった後は涙と鼻水で顔がぐちゃぐちゃだった。あれでよく授業を受けていたと思う。その辛い思い出のせいもあって、乗馬はできるようになったがあまり近づきたくないのだ。

「そうなんだ。アレルギーみたいなものかな？　高いところからいろいろ見渡せるし、風を受けると気持ちいいのに。でもソフィーにも苦手なことがあったんだね。なんだか親近感が沸くなぁ」
「わたしにだって苦手なことくらいあるわ。でも、ちゃんとギャロップまでできるんですからね」

ギャロップもできると聞いて唯愛は驚いたようだ。

「早く唯愛も上達して、わたしの邸まで来てくれなきゃ」

にっこり笑いかけると、気まずそうに顔を反らした。あら？

「ギャロップで酔うんだよ。まだ縦揺れについていけないみたいなんだ。これは慣れしかないだろ？　もうちょっとかかるんじゃなかな。この後も練習することになってるし、そろそろ行こうか？」

「ええー。思い出しただけで気持ち悪くなっちゃう」

リュドが楽しそうに言って立ち上がる。リュドってばスパルタ教育してるんじゃないかしら、少し不安だわ。リュドに手をひかれて唯愛も立ち上がると「また、お茶飲もうね」と言って二人で部屋を出て行った。

仲間に入れないことを少しだけ残念に思ったけれど、あの涙と鼻水を思い出すと乗馬場には近づきたくない。わたしは二人の様子が気になったが、王城を後にした。

０４　わたしとお仕事

あのお茶会から一ヶ月、わたしは多忙を極めていた。この二週間なんて家にも帰れていない。全ての元凶は父だ。

貴族は普通は労働なんてしない。政治に参加し、領地から上がった収益で生計を立てるのだ。しかも、父は貴族の中でも位の高い大貴族で、皇太子の指南役でもある。気ぜわしく労働する立場ではない。そんな世間一般の見解をよそに、父は貿易商として一財産を築いてしまったのだ。周辺諸国から、野菜や香辛料、布、宝石などどいろいろなものを輸入し、マルシェの商店や貴族たちに売るための会社を経営し、貴族のすべきことと掛け持っている。

父は二ヶ月くらい前から王城勤めが忙しいと言って王城に泊りこんでいた。そんな中、隣国、ストライフ王国で内乱が起こり、貿易の仕事に手が回らなくなってしまったのだ。隣国の内乱は一夜で終結し、前王に変わり、その血縁関係にあたる者が玉座に着いたという。スムーズにいった内乱ではあったが、外交で処理すべきことは多い。父はそれに追われているようだった。そして、貿易についても問題が起こったとかで、その処理をするべくわたしに白羽の矢が立ったのだ。初めは父の会社に赴き、指示を出していたがどうしても現地に行かなくてはいけない状況になり、ストライフ国へやってきてすでに二週間が過ぎてしまった。

現実的な話をすれば、心も体もくたくただった。手広く事業を広げていた割には、仕事の十分にできないスタッフが多く「こんなことまでわたしがしなくてはいけないの？」と何度も言いそうになった。

「それでは、今後もよろしくお願いいたしますね」

取引先から滞在先の宿屋へ向かう。「淑女のモラル」には未婚の女性が一人で外を出歩くことは危険だと書いてあったけれど、侍女のアリスはこの滞在を少しでも短くするべく別の仕事をしているのだ。昔の人が猫の手も借りたいという諺を言っていたけれど、まさに今のわたしの心情を言い当てている。あと一週間もすれば全ての処理が終わるだろうから、最後までやり遂げようとは思っているけれど、わたしだって異国の地で家族や友人と離れて過ごしていれば弱気になるのだ。皇太子妃になる人間として恥ずかしくないよう振舞ってきたけれど、とても心細かった。

「早く帰りたい」

ポツリと弱音が口からこぼれると、目頭が熱くなってしまった。ダメダメ。泣いている場合じゃないの、いい大人がこんな街中で泣き出すなんて恥ずかしいわ。

自分を叱咤して顔を上げる。すると、そばに馬がいた。その目が心配そうにわたしを見つめていた。

「あ、」

それを馬だと認識したとたん、涙があふれ出し、鼻がむず痒くなってきた。これは危険な状況だ、馬から逃げなくちゃ。わたしは宿屋に向かって慌てて駆け出した。

「あ、待て！」

成人した女性と馬。どちらが早い速度で移動するかなんてわかりきったことなのだ。いくらわたしが全力で駆けようともトロットで走ればすぐに追いついてしまう。

「泣いてるが、どうしたんだ？」

馬上の男性がわたしに話しかけているのはわかる。だけれど、こんな近くに馬がいては話すこともままならない。わたしは首と両腕を大きく振ってなんでもないから離れてと伝えるが相手には伝わっていないようだ。いつまでも馬に乗ってついてくる。

「おっ、おでがいだがらはだれで……」

なんとかそう伝えると、馬の脚が止まった。これ幸いとわたしはさらに足を全力で動かす。そして、ようやく目前に見えた宿屋の中に飛び込んだ。

早くお部屋に戻って身だしなみを整えよう、こんな姿を誰かに見られたら淑女失格だわ。「淑女のモラル」に、女性は落ち着きを持って行動するべきだって書いてあったなのに、今のわたしときたら、対極の位置にいるわ。

部屋に戻って身だしなみを整えてお茶を飲む。街で一番の宿屋のこの上等な部屋には滞在が一週間を越える頃から少しずつ置物や、露店の花といった小物が並ぶようになってきた。仕事帰りに見かけるとついつい買ってしまうのだ。この茶器もその一つ。こちらに来てからアリスにも仕事をお願いしているから、すっかりお茶を淹れるのがうまくなってしまった。国へ戻ったら、父には嫌味をこめて、リュドたちには自信を持ってお茶を淹れてあげよう。そんなことを考えながら愛読書でもある「淑女のモラル」を開く。先ほどの自分を反省するためだ。

本を開いてすぐに部屋のドアがノックされた。アリスが帰ってきたのだろうか。彼女にも辛い思いをさせている、労わってあげなくちゃ。

「どうぞ、入って。疲れたでしょう？　今、お茶を淹れるわね」

ドアの向こうを確認することもなく立ち上がると背を向け、茶器をセットする。

「失礼する」

聞こえてきた、男性の声にわたしは喫驚した。慌てて振り返ると、先ほど見かけた馬上の男性が後ろ手にドアを閉めているところだった。本当に恐怖を感じている時は声が出ないというけれど、今の状態がそれだった。異国の地で、見ず知らずの男性と部屋に二人きり。自分の迂闊さがまねいた事態だけれども、あまりの恐怖に体が動かなかった。

「そう怖がるな、怪しい者ではない。クロード・バシュロ・ナルカンという。声をかけたら逃げられたから、気になってついてきただけだ。どうこうしようという気はない。しかし、ドアに鍵も掛けず、ドアの向こうの人間を確認することもなく開けさせるなんて危険だぞ。いくらこの街の治安がいいからと言っても確認くらいはするべきだ。それで、さっきはどうしたんだ？　何か問題でも抱えているのか？」

矢継ぎ早に男性が言うのが聞こえた。だけど、あまりの衝撃に言葉を紡ぐことができなかった。男性が視線を彷徨わせる。踵を返してドアへ戻ると、大きく開けて戻ってきた。その行動にハッとする。「淑女のモラル」に男性と密室で二人きりになるのは避けるべきことと書かれていた。彼はその事を知っているのかしら？

「私がお茶を淹れよう。あなたは、そこへ座って」

そう言ってわたしから茶器を取り上げワゴンに戻すと、わたしをソファーへ引っ張っていき強引に座らせる。

「少しここで待っていて」

戸惑う私を気にすることもなく、ワゴンに戻ると器用にもお茶を淹れているようだった。

「待たせた。さぁ、一口飲んで落ち着くんだ」

「おいしい……」

勧められるがままに飲んだお茶はとてもおいしかった。

「それで、何があって道端で泣きそうになっていたんだ?」

わたしの向かい側に座った彼がまっすぐに見つめて聞いてくる。少しだけ落ち着いたわたしはティーカップを置くとゆっくりと彼と視線をあわせた。

「先ほどはお気づかいいただいてありがとうございます。それなのにあんな失礼な態度をとってごめんなさい。これといった困ったことはありません。ただ、お恥かしながら……わたし、馬に近づくと鼻水や涙が出てきてしまうんです」

恥を忍んで打ち明けると彼は目を丸くしていた。今にも泣き出しそうな、いや、鼻水が出るほど泣いていた原因が馬だなんて思ってもいなかったのだろう。

「そうだったのか。それはこちらが申し訳ないことをしたな。しか

し、あなたのような女性が供もつけずに街を歩くなんて危険だと思うのだが、こちらには一人で？」
「いいえ。一人と言うわけではないんです。父の仕事でこちらには来ているのですけれど人手が足りなくて、わたしについている者にも仕事を任せているんです」
「いい人材を紹介しようか？　女性があくせく働くべきではないとその本にも書いてあるのではなかったか」

まじまじと彼を見つめてしまった。そうなのだ。「淑女のモラル」に彼の行った通りの言葉が書いてあった。先ほどの行為と言い、彼も読んだことがあるに違いない。ここに来てようやく彼をしっかりと見つめる。
長めの前髪の間から覗く瞳は菫色で、何事も見逃すまいと厳格な色をたたえてわたしを見ている。濃紺の髪の毛は珍しいと思うが彼の厳しそうな雰囲気に良く似合っている。飾り気は少ないが高価な生地を使った乗馬服を着ているし、「淑女のモラル」を意識した行動が取れるくらいなのだから地位のある人物なのかもしれない。

「この本を読んだことがあるのですか？」
「答えにくい質問には質問で返すというのも載っていたかな」

この人、「淑女のモラル」を丸暗記しているのかしら。驚きが顔に現れていたようで、わたしを見つめていた瞳が和らいだ。

「失礼。今のはからかっただけだ。その本は従妹の愛読書だったんだ。その本を読むような女性が働いているなんて信じられんな。何か困っているなら相談にのろう」
「ありがとうございます。でも、本当に困ったことはないのです。わたしが働いているのは、父から手伝うように申し出があったからですし」

「お父上は仕事のできない状況なのか？」

その後、彼からまるで尋問のようにあれやこれやと尋ねられ、わたしはできる限りで正直に答えた。彼が害意を持っていないというのも伝わってきたし、仕事としてではなく話をするのは久しぶりなように思えた。そして、話の進め方が巧みで、意外にも機知に富んでおり楽しかったのだ。それに仕事の処理に関する有益な話もしてくれた。

「なんだか、この仕事を最後まで頑張れそうな気がするわ。本当はさっき、投げ出したくなっていたの。でも、あなたのおかげで早く仕事を終わらせて国へ帰ることができそう」

「ああ、やっぱり困っていることがあったんだな」

このクロード・バシュロ・ナルカンという男は鋭い眼光を持っている割に心配性で面倒見がいいようだ。何か手伝うことはないか、助けならいつでも入ると言葉の端々に滲み出ている。道端で目にとまったわたしに気遣うくらいだから、毎日誰かしら助けているに違いない。それとも、わたしってなにもできなさそうなのかしら？

「それは困っていることには入らないのよ。だってやらくなくちゃいけないことだから」

「気を張りすぎていると疲れるからほどほどにした方がいい」

「ありがとう、優しいのね」

「美しい人にはね」

心配をありがたく受け取ったお礼に、蕩けるような笑みで言ってくる。もちろん、冗談だとわかっているけれど、その甘い表情に思わず赤くなるのを止められなかった。こ、この人、ハンサムだわ！

ドキドキしているのを悟られないようにうつむいた時だった。

「ソフィー様っっ！　」

ドアのそばでアリスが叫びながら目を丸くしている。驚きのあまり、卒倒してしまうのではないかと不安で彼女に駆け寄る。

「大丈夫、アリス？」

「そ、それはこちらの台詞です、ソフィー様！　お部屋で見ず知らずの男性と二人きりだなんて、なんてこと」

いつもの自分を取り戻したアリスが小言を言い始める。

「でも、ちゃんとドアが開いていたでしょう？」

「そういう問題ではありません、このような異国で何かあったらどうするのです！　もっと危険について考えていただかなくてはいけません！　このことは旦那さまにもご報告いたしますからね。そうしたら、しばらくは外出禁止ですよ！　ええ、そうしていただきますからね！！」

これでは主がどちらかわからないではないか。お客様もまだいると言うのに。やれやれと、部屋の中央にいるであろう男性に視線を向ける。

「では、帰国する前にまた会おう、ソフィー。失礼」

彼はすでに席を立ちドアのそばにいるわたしたちのそばまできていた。そして、驚いているわたしたちに構うことなく告げると、わたしの頬にスッと唇を寄せて去っていった。

もちろん彼が去った後のアリスの小言は寝るまで続いた。

ところでわたし、彼に名前を名乗ったりしたかしら？

05　わたしに隠されていたこと

「ようやく仕事が終わりましたね。どうです？　少し観光でもしてから帰りませんか。ソフィー様は立派に仕事を成し遂げたのですから少しぐらい遊んで行っても旦那さまがお叱りになることもないですわ！」

突然の出会いから三日。教えてもらった通りに仕事をこなしたらあっという間に終わってしまった。すぐにでも国に帰りたかったわたしにアリスが言ってくる。

「それに、先日お会いしていた殿方が帰国前にソフィー様に面会を求めていたじゃありませんか。いいのですか？」

それは確かに気になってはいた。あれ以来、クロード・バシュロ・ナルカンには会っていない。どんな人物なのか取引先の人たちや宿屋の主人にも聞いてみたが首をかしげるばかりだった。

「あのね、アリス。わたしはオーランシュの皇太子妃候補なのよ。よくわからない男性と会うなんてよくないわ。それにあの方が勝手に言い放ったことだから約束とは言えないのよ。だから、明日帰ります。荷造りもあるだろうから、他の者たちにも伝えて。これは決定よ」

わたしが言い放つとアリスは困った顔をしていたが、諦めたのかおとなしく部屋を出て行った。突然出会った男性よりも、今はリュドや唯愛に会いたい気持ちの方が強い。それに慣れない異国の宿屋よりも自分の部屋で静かに休みたかった。

一方的に会う約束をして去って行った彼には手紙で詫びることに

しよう。宿屋の主人に託しておけばいつか彼の手元に渡るだろう。彼のおかけげで仕事が順調に進んだのだから直接会ってお礼を言いたいところだけれど、いつ現れるかわからない人を待つよりも早く故郷に帰りたいと思うのは仕方のないことでしょう？

次の日の朝、長くお世話になった宿屋の主人にお礼と共に手紙を託した。ナルカン氏に会えないことは残念だったが、家に帰れるという喜びの方が大きかった。意気揚々と馬車に乗り込み帰路に着いた。

違和感に気付いたのは城下町への街道に入ってからだ。この街道沿いに城下町までは大小様々いくつもの街がある。大きな街に入るたびに違和感が強くなった。誰かが何かを言ってくるわけではないがすれ違う人々の視線に何かが含まれていた。わたしは長く皇太子妃候補として常にリュドの隣りに立っていたから国民にはそれなりに顔が知られているのだ。

「おやまあ、ソフィア様じゃないですか！　こんな時期に一体どうなされたというんです。なんてことでしょう！」

なじみの宿屋の女将が店に入るなり言ってくる。意味がわからなかった。

「こんな時期？　どんな時期と言うのです？」

わたしの問いをどう受け止めたのか女将は顔を青くすると、もごもごと謝罪を述べていた。しかし、謝られる理由もわからなく首を傾げてしまった。今度はそれを見た女将の隣りに立つ主人が慌てて言いだす。

「おい、お前。余計なことを言うもんじゃないよ」

全く意味がわからない。何を慌てているのかはっきりさせなくては。

「まあまあ、それくらいにしてください。ソフィー様はお疲れですからね。いつもの部屋を用意してくださっているのよね？　さあ、ソフィー様お部屋へいきましょう？」

わたしが口を開く前にアリスがわたしたちの間に入って話を切り上げる。なんだか有耶無耶になってしまったが、確かに一日中馬車に揺られて体がかちこちになっている。早く温かい湯につかりたいと思っていたから、この話は食事の時にでもはっきりさせよう。

「そうね。女将、お湯の準備はできているのでしょう？　それに食事も楽しみにしているわ。よろしくね」

そわそわと落ち着かない様子の女将に微笑みかけると、今度は悲しそうな顔をして何度も頷いてきた。今日の女将はなんだか様子がおかしいようだ。何か困ったことが起きたのかもしれない。後でそれとなく助けが必要か聞いてみよう。

この宿は食事が素晴らしいと有名だ。女将が作る素朴だが温かみのある料理は一流シェフ顔負けで、味だけでなく、そのボリュームもお客に満足以上のもたらすと旅人たちに人気がある。様子のおかしい女将直々に給仕してもらいながら食事を取る。

「ねぇ、女将？　先ほどは取り乱していたようだけれどどうしたの？　何か困ったことでも起きたの？」

食事を取りながら女将に尋ねる。それとなく聞くつもりが真っ向

から聞いてしまった。ちゃんと答えてくれるかしら。

「えっ！」

女将が言った途端、ガチャンとスプーンが落ちる。女将の持っていたスプーンが食器とぶつかったようだ。こんなに動揺しているのだから、なにか問題が起きているに違いない。

「わたしにできることならなんでもするわ。女将の料理が食べられなくなったら悲しいもの。ね？　話して」

忘れていないわ。「淑女のモラル」に書いてあった、「手負いの動物は警戒心が強いから、まず安全を伝えることが大切」の実行のタイミングだわ。優しく微笑みかけて大丈夫だって信じてもらうのだ。

しばらく女将を優しく見つめていた。すると、いつもニコニコして目じりにしわを寄せている女将の目が大きく見開かれ、大粒の涙がこぼれ出した。

「どうして、こんなに優しいお方が！」

そう言うと女将はおいおいと泣き出してしまった。これは大変だ。わたしは食器を置いて女将に駆け寄った。泣いている女将に腕を回し背中を撫ぜて落ち着けるようにする。

「大丈夫よ。わたしが必ず力になってあげるわ。ね？　何があったの？」

「みんな、酷いですよ！　こんなにお優しいソフィア様なのに……それなのに、あんな大事なことを伝えずにいるなんて！　勝手に進めてしまうなんて！　わたしは絶対に反対なんです！　わたしはい

つだってソフィア様が一番だって思っているんです。そ、そりゃあ、殿下だってこの宿を使ってくれますからね、だからもちろん良く思っておりますよ？　でも今回のことだけは反対です！　ええ、絶対に！！」

女将はいつの間にかわたしの腕の中で涙を引っ込めて、最後の方は大きな声で叫んでいた。

「殿下？　それはリュドヴィック様のことかしら？」
「ああ、ソフィア様！　なんだってそんなお優しい口調で殿下のお名前を呼ぶんですか！　あの方にそんな価値はありませんよ！　ええ、絶対に！」

なにかリュドがこの宿で問題を起こしたのだろうか？

「この宿で殿下が何か問題を起こしたの？」
「いいえ、いいえ！　違いますよ！　ええ、絶対に！」

女将は酷い剣幕でわたしの腕から飛び出した。その勢いにわたしが足元をふらつかせ床に倒れこんだが女将は気がつかない様子で言い放った。

「殿下が婚約発表したんですよ！」

「女将っっ！！」

「どこの馬の骨かもわからない、異世界の女と！」

大急ぎでやってきたアリスが女将の口を塞ごうとしていたが、それは間に合わず、女将は最後まで言い切るとハァハァと肩で息をしていた。

「何が気に食わないって、それをみんなでソフィア様に隠していることですよ！　こんな大事な時にソフィア様がお越しになるからどうしたのかと思っていたんですよ。そうしたら、なんてことでしょう！　ずっと、ストライフにいただなんて！　国王が変わって混乱しているさ中ですからね、殿下が婚約を発表しても簡単に伝わらないと思ったんでしょうよ。きっとソフィア様が帰国されないうちにお式も済ませてしまうつもりだったに違いありませんよ。ええ、絶対に！　だってお式は明日ですからね！」

リュドが唯愛と……？

「女将、それ以上はやめなさい！　口を慎むのです！」

「国民みんなが知っていることですよ！　それなのに、みんなでこんな大切なことをお優しいソフィア様に隠して！　信じられません、ええ、絶対に！　絶対に！」

その後も女将はいろんな罵りの言葉を言っていたが、耳に入ってこなかった。

ただ、本当のことが知りたいと思った。厩舎へ向かい、鼻水も涙

も気にすることなく馬の準備をして一人王城へ向かう。今ここを立てば、単騎であれば明日の昼には王城へ着くことができる。

きっと全部悪い嘘だ。わたしはずっとリュドの隣りにいた。それはこれからも変わらないって思っていたのに。

どうして？

06　結婚式の日

わたしが顔を鼻水と涙でぐちゃぐちゃにしながら城下町に着いたのは次の日の陽の高く上がった頃だった。一晩、休むことなく馬を走らせたせいで馬には限界が来ており、城下町に入るための門をくぐるころにはわたしは馬から降りて歩きながら手綱をひいていた。このまま王城に向かった方が早いだろうが、一晩走ってくれた馬や、自分の身なりのことを考えると、そのまま城に向かう気にはなれなかった。一つだけありがたいのは、酷い身なりのせいですれ違う誰もがわたしをわたしだと認識しないことだ。

一晩馬上でいろいろんな思いが胸をよぎった。その思いの大半は「どうして？」と思う気持ちや、空しさだった。

なぜ誰も教えてくれなかったの？　隠そうとしてきたの？

これまでなんのために生きてきたの？　生かされてきたの？

意外なことにリュドと結婚できないことを悲しむ気持ちは少なかった。ただ、退け者にされたことの悲しさが大きかった。そんなにわたしは聞きわけがないと思われていたのだろうか？

すごく、すごく空しかった。

自宅で身なりを整えた。邸には必要最小限の人手しかなく、多くの者が城の前にある広場に行っているということだった。わたしの家族も賓客として招待されたということだ。それをわたしに伝えるとき、ムーレ家に長く仕える年老いてはいるが有能な執事はとても言い難そうにしていた。

「お嬢様、そのような場所に行かれるべきではありません。嫌な思いをするに決まっております！」

わたしが広場に向かおうとするのを彼は必死になって止める。

「嫌な思いはもうしているわ。これ以上どんな嫌なことがあるというの？」
「お、お嬢様！！」
「ねぇ、ベルナール。わたし、とても嫌な思いをしているわ。でもね、とても悲しんでるの。知っていたのに教えてくれなかったんでしょう？　ちゃんと全部知りたいの。わたしが知りたがりだってことは知っているでしょう？」

お父様からわたしを結婚式典に出席させないようにとでも言い付かっているのであろうベルナールはわたしが外へ出ようとするの阻む。

「お嬢様！　ですが、今は馬車もありませんし、供をできる者も不在でして、こんな時に外出など危険です」
「歩いて行くわ、すぐそこだもの。それに何が危険だと言うの？　わたしに価値なんてないもの。それじゃあ、留守をお願いね」

さらに言い募る老執事を無視することに決めてわたしは一人、広場へと向かった。

広場はちょうど今日の主役である二人が王城のバルコニーから出てきたところだったらしく大歓声に包まれていた。皇太子妃が観衆の知る顔と違っていようが問題はないようだった。二人を祝福する声や拍手が響き渡り、皇太子殿下とその妃は幸せそうに顔を見合わせた。この日のために大急ぎで作られたであろう二人の純白の衣装は、そうとはわからないほどの美しさで、そして良く似合っていた。
いつから？　なんてことを聞くつもりはなかった。わたしのリュドに対する思いは純然たる恋心だったとは思っていない、だからあ

んな風に幸せにほほ笑みあえる二人ならわたしだって祝福するに決まってる。一国の皇太子であろうと、幸せな結婚をしていいのだ。だから、二人が思い合っているのだと言うなら教えてくれたらよかったのに。二人を見つめていると「どうして？」という気持ちばかりが募った。

「ソフィー！」

その声が聞こえた時は戸惑いが大きかった。
どうして、彼がここに？

「ソフィー！　なぜここにいる？」

わたしも思っていることを先に言った声の主を探そうと辺りを見回していると、背後から肩に手がおかれ振り向かされた。そこには先日会った時よりも一層美しい装いをしたクロード・バシュロ・ナルカンがいた。

「……ナルカンさん？」

美しく着飾り一段と男らしい彼に少しだけ見惚れてしまった。

「忘れられてしまったのかと思った」

彼は反応が遅れてしまったわたしを詰るような視線を向けながら言ってくる。

「どうしてここにいるんだ？」
「だって、ここは私の住む国ですもの」
「だが、ストライフで仕事をしていたろう？　投げ出してきたのか？」
「まあ！　失礼ね。わたしに仕事のやり方を教えてくださったのはあなたでしょう。あなたのおかげで仕事が早く終わったから帰国したのよ。一方的に約束を押し付けた誰かさんがいつ会いに来てくれるかもわからなかったし」

少しだけ拗ねたように言う。

「まだ帰国まで時間がかかるかとばかり思っていた。あなたの手腕を見くびっていたようだ、すまない」

彼は少しだけ驚いた顔をした後、真摯に謝ってくれた。出会ったときから揺るがない彼の姿勢はとても好感が持てる。
けれど、そんな彼がすぐに謝ってくれたことが少しおかしかった。

「あなたも謝ったりするのね」

わたしがほほ笑みながら言うと、彼は心外だとばかりに眉間に皺をよせ口を開こうとした。

「わたし、あなた宛てに手紙を書いたの」

彼が言葉を発する前に言ってしまう。彼は今度は目を少しだけ開く。驚いたようだ。

「いつお会いできるかわからなかったから、宿屋の主人に託してきたの。あの時、気にかけてくれたことと、仕事の助言していただい

たお礼をしたかったの。
あなたのおかげで仕事がとても速く終わったし、あの日一緒にお話ができてとても楽しかったわ。あの時、お会いできなかったら、まだストライフで仕事に追われていたと思うわ。本当にありがとう」

途中で照れて言えなくなってしまう前に思い切って言ってしまう。ちゃんと言いきれた自分に安心して頬が緩んでしまった。しかし、彼からの返事は何もなく、不審に思い彼を見上げる。そうなのだ、彼は背が高い。わたしもそれほど背が低いわけではないのだが、そんなわたしも彼の顔を見るときは見上げてしまう形になる。
彼は視線を反らし、口元を押さえ、もごもごと何かをつぶやいていた。

「どうかなさった？」

首をかしげながら彼に尋ねる。

「い、いや。なんでもない。ストライフへ戻ったらあの宿屋に立ち寄って必ず手紙を受け取ることにしよう」

彼がそう言ってくれたのが嬉しくて、自然と笑顔になった。

「ソフィア！　なぜここにいる！」

次に現れたのは血相を変えたお父様だった。大急ぎでやってきたのだろう、ぜぇぜぇと肩で息をしている。

「お父様！　なぜって先ほど、帰国したのよ？　ストライフを立ったと先触れを出したでしょう？

それより、わたくし、伺っていなかったことが山ほどありますわ。しっかり説明してくださいますわよね？　そうじゃなければ、もう二度と決してお仕事のお手伝いなんてしませんわ」

お父様にきつく詰めよる。そうだ、みんなが何も教えてくれなかったことを辛く思っていたのを忘れていた。

「いや、それは。もちろん、悪かったと思っているさ。もちろんだ！　だが、ほら、いきなり唯愛が現れて殿下が唯愛と結ばれたろう？　そうなってはお前が随分悲しむと思ったんだよ、二十六年も待って捨てられるのと同じじゃないか！　だから、少しでも知らせるのを先送りしようと思っていたんだが。いや、だが、ほら、わかるだろう？　殿下のご事情もあったし、そうしたら殿下がすぐにも結婚すると言いだして、それに、ほら……なぁ？」

お父様はしどろもどろになって説明をしている。いや、これを説明ととっていいのだろうか？　言い訳じゃないのかしら。全くもって意味がわからない。

「シリル殿、ここは観衆の目もあります。あなたのような方が動揺されているのを見れば、あなたたちのたてた筋立てが疑われてしまいますよ？」

お父様が慌てていると、ナルカンさんが助け舟を出す。彼は何かを知っているようだ。

「おお！　クロード様！　なぜこちらに？　あなたこそ、このような場所におられてはいけません。さ、もうじきパーティーが始まりますからね、ホールへお向かいください。

ソフィア、お前は邸に戻るように。お前はもう、婚約者候補だっ

た貴族の娘であり、招待客ではない。今宵の宴に出席するべきではない。わかるだろう？」

わかっていたことではあったけれど、お父様の率直な物言いに現実を知り少しだけ胸が痛んだ。咄嗟に表情を取り繕ったが失敗してしまい、返事が遅れる。

「わたしが邸まで送りましょう」

「クロード様！　パーティーが始まってしまいますし、わが娘のことなど気にかけることはありません！！」

「ムーレ嬢、エスコートさせてください」

お父様がぎょっとして言う。しかしナルカンさんはお父様を気にかける様子もなく、わたしに腕を差し出す。この腕を取ってもいいのだろうか。躊躇して空を彷徨う私の手を取ると自分の腕において歩きだしてしった。

「あ、待って」

わたしは少しだけ彼をひきとめる。

「お父様！　邸に戻ったらゆっくりお話をきかせてくださいね」

お父様に向き直ると、それだけ言ってナルカンさんにエスコートしてもらい邸へ戻った。

07　わたしの家路

「あなたは今日のことを知らなかったのか？」

広場から邸まではあっという間なのだが、ナルカンさんが少しだけ話をしたいと言ったので遠回りをして邸に向かうことになった。

「ええ。何も知らなかったわ」

「悲しんでいるんだろうな」

そう言う彼の方が悲しそうな顔をしていた気がする。

「そうね。すごく悲しいと思っていたの。でも、今は全部、投げ出したい気分。だって、わたし、これまでずっと皇太子妃になると思って生きてきたのよ？　二十六年間も。それなのに、なにも教えてもらえなかったの。　わたしには何も教える必要がなかったってことなのかしら。そうだとすれば、すごく悲しいわ」

「そんなに殿下の正妃になりたかった？」

最初は刷り込みだったと思う。でもいつからか皇太子妃さらには王妃になることはわたしの夢だった。そして、それはいつでも叶うと思っていたのだ。ずっと目の前にあったから。それが不可能となった今、わたしはどうすればいいのだろう？

今さら、何ができるのだろう。

もし唯愛が現われなかったらわたしの夢が叶ったのだろうか。

彼女がいなければなんて思ってはいけないけれど、こんなことが頭をよぎるなんて、どんなときにも心広くある人間にはなれなかったようだ。

「なりたかったというのとは違うわ。わたし、本当に物心ついたころから『皇太子妃』になるべく教育されてきて、わたし自身も皇太子妃さらには王妃になるべくたくさんのことを学んで、行動してきたから、なりたいとか希望的なことじゃなくって、決定事項だったの。周りだってそうなるものだと行動してたわ。それなのに、殿下が唯愛と結ばれたからって、それをわたしに隠して物事を進めるなんて酷いわ。それがすごく悲しいの。彼女をあちらの世界に返したら、元に戻るのかしら」

「彼を愛していた？」

ナルカンさんが愛なんてことを口にするとは思わなくて少し瞠目する。その様子が腕から伝わったのか、彼が視線を下げまっすぐにわたしを見つめる。その視線に嘘をつけないと感じるのはなぜなのだろう。わたしは小さく笑ってから白状した。

「彼をそういう対象にみていた頃もあったの。そういうことに憧れる時期は誰にでもあるものでしょう？　でも叶わない想いはいつかからか風化してしまったの。実らなくても想い続けることはできるって周りの人たちは言うわ、たくさんの物語でも目にするし。でも、わたしはそうすることができなくて……きっとそういう感情が乏しいのかもしれないわ。だから、そう言った意味では今回のことを悲しんではいないわ」

「では、あなたは本当の恋を知らないんだな」

「きっとね」

ナルカンさんが息を吐くのが伝わってきた。わたしのことでそんなにも思いつめていてくれたのかと思うと、すごくありがたい。この方は本当に面倒見がよくて心配性なのだ。

「それでも、まだ皇太子妃になりたいのか？」
「いいえ。わたしはあの二人を祝福しているわ。だって大好きな二人だもの。あんな二人を見て、それでもまだ唯愛を元の世界に返したいと思うようなわたしではないのよ。直接お祝いを言わせてくれない二人には怒ってはいるけれどね。
ところで、あなたはずっとわたしが誰か知っていたの？　あなたは何者なの？」

そうだ。
ずっと思っていたことがわたしの口からこぼれた。

「勉強家の知りたがりのあなたにも知らないことがたくさんあるようだな。前回会った時にちゃんと名乗ったはずだが？　私については勉強していただけなかったようだな」

彼は冗談めかして言う。わざとらしく悲しんでいるような表情を作っていた。

「いいえ！　ちゃんと調べてはいないけれど、聞き込みはしたわ。でも宿屋の主人も取引先の人たちも誰もが首を傾げていたわ」
「あそこはわたしの陣地だ。敵陣にいては知りたいことも隠されてしまうものさ」
「まあ！　あなたもわたしに隠しごとをしているということ？　みんな、そうやってわたしにいろんなことを隠すのはなぜなのかしら。すごく悲しくなってくるわ」

なんだか涙が出そうだった。出会ったばかりだと言うのにナルカンさんにまで隠しごとをされていることがとても辛く感じて、涙がこぼれないように何度か瞬きをして俯いた。自然と足が止まってしまう。

「ソフィア？」

彼が様子を窺うように声をかけてくるのはわかった。だけれど、鼻がツンとして目頭が熱い。うまく話せない気がして、こたえられなかった。

「ソフィア、泣かないでくれ。すまない」

そう言うと彼はわたしの顔を覗き込む。すぐ近くに彼の顔があるとわかると、さっきまでの悲しみが飛んでいき、次にこの状態をどうすればいいのかという動揺が体中を駆け巡る。そんな状態でわたしが固まっていると、白い手袋に包まれた長い指が目じりをそっと撫ぜて涙を拭う。右目、左目と拭った後、そっとその手を頬に寄せる。彼の触れた目元や頬が熱くなる。まるで全身の血液が集まっているのかのようだ。そして、心臓がどくどくと脈打っていた。ふと、その手が離れるとともに彼の顔も離れていく。それはきっと数秒の出来事だったのだろうが、わたしにはとても長い時間に感じた。もし、彼がいつまでもその手を離してくれなかったら、顔中が熱くなって倒れていたかもしれないとおかしなことを考えていた。

「すまない。ソフィア。前回会った時に私の身分を明かすことはまだできなかったんだ」

彼はわたしの腕をその腕からはずと正面に回り込んで慇懃に頭を下げた。

「私は名を、クロード・ストライフ・バシュロ・ナルカンと申します。先日、ストライフの王となりました」

そこで彼は頭をあげる。では一夜で終結した内乱で、前王に変わり、玉座に着いたのが彼なのだろうか。

「あなたと出会った時にはすでに王位についていたのですが、王が大っぴらに出歩いていると知られるのは得策ではありません。あの辺は私には馴染み深い場所のため、言わずともみなが口を噤んでくれるのです。意図的に身分を隠した私を許していただけますか？」

一国の王に頭を下げさせていいのだろうか。いや、いいわけがない。「淑女のモラル」に……なんて言っている場合ではない！！

「し、失礼いたしました。その様な貴き身の方に頭を下げさせるなんて、大変な失礼を！！　申し訳ありません」

わたしは大慌てで膝を折り頭を深く下げた。先ほどとは違うところで心臓がばくばくと鳴っていた。わたしの礼を欠いた態度が元で両国間に軋轢が生じたらどうしよう！　彼を気安くナルカンさんなどと呼んでいたことを思い出し嫌な汗が背中をつたった気がした。

「ソフィア、許しを請うているのは私だ。さあ、頭をあげて、私を許してくれないだろうか？」

彼はわたしの腕に手を添えて頭をあげさせる。そして真摯な眼差しでわたしを見ていた。なんと答えるべきなのかわからなかった。

「……許します」

小さな声で一言だけ呟く。彼に見つめられて、なぜかそれ以外の

言葉が出てこなかった。わたしの小さな声が聞こえた彼はとても嬉しそうに笑い、そのせいでまた何も言えなくなり再び小さく俯いて目を反らした。

「あの時、私が本当の身分を言えばあなたは今のように接しただろう？　わたしはあなたとは対等にありたいと思っているんだ。だから、これからも今までのように接してくれないだろうか」

陛下は視線をあわせるべくわたしの頬に手を添えて顔をあげさせる。再び彼が触れたところに血液が集まりはじめ、鼓動が速くなってくるのがわかった。彼の瞳はまっすぐにわたしをみつめていた。

「ソフィア」

決して力強くわたしに触れているわけではないのにその拘束から逃れることはできそうになくて、そしてわたしが是と答えるまで逃がしてくれないことがわかって、わたしは言葉を忘れたかのように首を縦に振ることしかできなかった。

徐に彼の手が離れて行った時、安堵のせいか足から力が抜けてしまいわたしは地面に崩れ落ちる。はずだったのだが、それをいち早く察した彼の手が再びわたしに戻ってきてぎゅっと抱きしめられる形で支えられる。

「わたし、なんだか足に力が入らなくて、ごめんなさい」

彼の胸元でなんとか力を入れようとするのだが、それは酷く難しいことで、言い終わる頃には彼の胸に手を添えて必死に縋ることになっていた。

「すまない。驚かせたか？　安心するといい、私がちゃんと邸まで

送るから」

そう言うが早いか彼はわたしの膝裏をすくいあげて横抱きにする。そうでなくても速かった鼓動が一層速くなり、目眩がしそうだった。気が遠くなるような気がして目を閉じようとした時、顔のすぐそばで彼の優しい声が聞こえた。

「落とすつもりはないが危ないから、私の首に腕を回して捕まるんだ」

彼に触れられていると言葉を忘れてしまうのだろうか、何も言えなくて小さく頷いて彼の首へ腕を回す。その後は、目を開けていられなくてキュッときつく目を閉じた。

彼はわたしを抱いていると感じさせない足取りで歩きだす。その足取りに迷いがなく、邸まで案内もなくたどり着いてしまった。邸の前で門を開ける頃になってようやくわたしはそっと目を開けた。陛下はわたしを抱いたまま門を開けると、そのまま玄関へ向かう。

「陛下？　わたし、もう降りますわ」

「いや、あなたは疲れているのだから、こんな時くらい誰かに頼ることを学ぶべきだ」

玄関でノッカーを叩く時も、ベルナールがギョッとしながら扉口に立った時も、わたしの部屋に向かう時も、わたしを下ろすという選択肢は彼の中にはないようだった。ようやく部屋にたどり着きわたしをベッドの上に下ろす。部屋の扉は閉じていたが、部屋にはベルナールもいるから「淑女のモラル」は安心だ。甲斐甲斐しくわたしをシーツに包むと彼は枕元に腰をかけて、わたしの白菫色の髪を梳く。なんだかまた熱が上がっていく気がした。

「また明日来る。それまでゆっくり休むように。疲れているのがよくわかる。明日は美しいソフィアに会いたい。もちろん疲れていてもあなたが美しいのは変わらないが」

そう言うと静かに額に口づけを落としてほほ笑む。口づけられたところが熱をもっているのがよくわかった。

「では、しっかり休むように。おやすみ、ソフィア」

そう言って立ち上がると、未だに驚いている老執事に「失礼」と一言だけ言って案内もなく彼は去って行った。静かに部屋の扉が閉まるころには、さっきまでの鼓動の早さは嘘のように落ち着いていてわたしは深い眠りに落ちる寸前だった。

その夜見た夢はとても心地がよかった。

08　彼と彼女

目が覚めるとすでに朝になっていた。厚いカーテンの隙間から眩しい日差しが差し込んでいる。ベッドから降りると、そのカーテンを開けて窓から外を眺める。

侍女を呼ぶとアリスが入ってきた。アリスも無事に邸に帰ってきたようで微笑みかける。彼女は肩をすくめて大きく息を吐いた。

「なんて無茶をなさるんですか！　気が気ではありませんでしたよ。もう二度とわたしにこんな思いをさせないでくださいね」

プリプリと怒っているアリスを見ていると嬉しい気持ちになって笑顔になると、さらにアリスが小言をもらす。幸せだと思えた。殿下との婚約が叶わなかったって、婚期をとうに逃していてこれから先いき遅れと言われることになったとしても、こうやって小さな幸せがこれからも続くのであればそれはそれでいいと思った。

「ねえ、アリス」

ぶつぶつ言い続けていたアリスが口を閉じてわたしを見つめる。

「わたしのこと心配してれてありがとう。ずっと、あなたはわたしのことを思って行動してくれていたのよね。ありがとう、すごく嬉しい。これからもよろしくね」

そう言ってからにっこりとほほ笑みかけると、アリスは笑うことに失敗したかのように顔をくしゃりと歪めてしまう。しばらく瞳にたまっていた涙はしばしの時を経てポロポロとこぼれ出し、彼女の気持ちが伝わってきた。

「ソフィー様、申し訳ありません。殿下と唯愛様のことを隠していて、申し訳ありませんでした」

アリスが深々と頭を下げる。こんな風にアリスが謝罪するのは初めてだった。

アリスはわたしが十歳の時からわたしに仕えている。二歳年上の彼女は時に主従関係を越えて姉のようにわたしに仕えてきた。彼女との信頼関係は間違いなく存在している。それはこれからだって変わらない。

「いいの。本当のことを教えてもらえなかったことはとても悲しかったけれど、今はあなたたちの優しがわかるから。わたしのためを思ってのことだったのでしょう？　ね、アリス。これからもわたしたち変わらないわ」

アリスを頭を無理やりあげて瞳を合わせる。彼女に微笑んでからぎゅっと抱きしめた。彼女も抱きしめ返してくれて、二人で笑い合った。

それから久しぶりにゆっくりと湯につかり体をほぐした。心も体もほぐれて、ほっとした。

ふと昨日、彼の唇が触れた額に手をやる。俄かに胸の奥が痛む。どうしてしまったのだろう。彼の眼差しを思い出すと、昨日のように鼓動が速くなってくる。去り際に「また明日来る」と言っていたけれど、一国の主がそう簡単に他国の貴族の娘と会うことができるのだろうか。彼はやはり会いに来てくれないかもしれない。だけれど、彼の来訪を期待している自分がいた。そして、また「ソフィア」と厳しくも柔らかい口調で名を呼び、見つめてもらいたいと密かに

思う自分を感じた。

「ソフィー様！　お顔が真っ赤ですよ！　大変ですわ、逆上せていらっしゃいます。早くお湯から上がってください」

その後、アリスに手伝ってもらいながら身支度を済ます。身支度が念入りになってしまったのは仕方ないことだと思う。

簡単に朝食を済ませた後、お父様が待っているという書斎に向かった。昨日のよくわからない言い訳を説明してもらおうと意気込んで扉をノックする。

「入りなさい」

扉の向こうから声がしてわたしは中に入った。促されて用意されているソファに腰かける。そして、向かいにお父様が座った。彼はコホンと一つ咳をしてからわたしと視線をあわせた。昨晩は遅くまで結婚式典が行われていたのであろう。少し疲れているように見えた。

「ストライフでの貿易事業は滞りなく済ませてくれたようだな。ありがとう。私が思っていた以上の仕事ぶりを発揮してくれたことを感謝する。すでに報告書は読んでいる。見事な手腕だ。全く、お前は娘にしておくにはもったいないよ」

まずは話しやすいことからということだろうか。お父様がすらすらと言葉を述べる。最後のはなんだか引っかかるものがあるけれど。

「さて、聞きたいことを聞くがいい」

しかし、あっさりとお父様は次の話題に切り換えた。一晩かけて腹を括ったのだろうか？

「そうね。昨日まではいろいろと憤りも感じていたわ。だけれど、幸せそうな二人を見たらどうでもよくなってしまったの。だから聞きたいことは一つだけ。どうしてわたしに何も打ち明けてくれなかったの？」

わたしの問いにお父様は悲しそう顔をした。まるで二人が結婚して悲しいのはお父様のようだ。

「お前には本当に悪く思っているよ。

殿下が唯愛様に惹かれたのは彼女がこちらに来てすぐのころなんだ。殿下はお前も知っている通り、心のよいお方だ、彼女に惹かれ始めてすぐに私のところに来てお前についての相談をしてきた。お前はずっと婚約者候補の筆頭で、ほぼ、婚約者だった。それがぽっと出の少女に取って変わられるんだからそれはちょっとした問題ではない。

だから私はこう述べた。ソフィアを正妃、唯愛様を側妃にしてはどうかと。お前と殿下が想い合っていないことはわかっていたし、立場などの問題も考慮すればこれが一番問題の無いやり方だと思えた。現に、三人でお茶会を開いている様子などを見ればそれが可能だとも見えた」

その状況を想像して眉間に皺がよる。愛し合っている二人の間にいるわたしってなんなのかしら。

「しかし、その提案を殿下は即座に却下され、こう述べられた。お前を召し上げるつもりは一切ないと」

お父様の言葉に息が詰まる。わたしは彼から嫌われていたのだろうか。表情を的確に読んだお父様が慌てて言う。

「いや、殿下はお前に悪感情を持っているわけではなかった。その先は教えてはいただけなかったが、決してお前を嫌っての発言ではないと強く申されていた。殿下には殿下の事情があるようだった。それは私にもわからないが」

まだまだ隠し事はあるということか、大きな隠し事だと他人事のように思ってしまった。

「お前は皇太子妃、後には王妃となるべく育てられた。だから二人のことを知って悲しんだり、もしかすると唯愛様を、殿下を憎むかもしれないと周囲は考えた。もちろんお前はそんな思惑の通りの淑女ではない。今もこうして二人を祝福しているしな」

唯愛や殿下もわたしがそんな人間だと思ったのだろうか。それはとても悲しいことかもしれない。表情を取り繕えなかった。お父様はただおろおろするばかり。

「もちろん！　殿下も唯愛様もお前がそんなことをするはずがないと仰っていた。だがしかし、あれだ。殿下は少々色ボケしていてな、あの頃は。唯愛様と無事に結ばれることができれば多少のことは構わないと思っていた節がある。あのお優しい方が、優しさのほとんどを唯愛様へ向けていたというわけだ。今は、だいぶましになられたけれどもな」

殿下の様子を聞いて眉が寄る。彼が色ボケするなんて想像も……ついた。あの日、スキップしでもしそうなくらいご機嫌で部屋に入

ってきたではないか。あれはそういうことだったのだ、二人で何かが間にあったのだろう。思いにふけるわたしに注意を戻すようにと、お父様はまたコホンと咳をする。視線をお父様に戻した。

「お前はまず二人とさりげなく距離を取られ、隣国へ移された。ストライフで王権交替が行われたのはタイミングがよかった。本来は適当な地へ貿易拡大とか言って送り出すつもりだったからな、それらしくお前をここから引き離すことができた。お前がいない間に婚約発表が行われ、お前が帰ってくる頃には二人は夫婦になっており、何を言おうとも遅いというわけだ。

唯愛様と殿下とお前のエピソードはこうだ。突然、異界より現れた少女をお前たちが世話をしているうちに、二人が惹かれあい、お前は快く身を引いたというわけだ。王城から、城下からも身を遠ざけ、結婚に参列しないのは二人がお前に気を使わないようにするためということさ。これで悪者は一人もいないわけだよ」

「それでは、わたしはこのまま城下にはいられないということですか？」

「まあ、そういうことになる」

気が遠くなる。悪者は一人もいないなんて。わたしの生活など多少変えようが悪いことではないということなのだろうか。皇太子妃候補から外れると扱いがわるくなるのだろうか。

「それについてなんだが、お前にはストライフに行ってもらうと思う。今回のお前の働きは素晴らしいものがあった。あちらにも事務所を設け、それをお前に任せることにした。お前のために邸は用意してある。もう二週間もすれば完成するだろう。それに合わせてあちらに赴くように。

国内のどこかの別邸に療養と称して移すつもりだったが、お前には仕事をさせていた方がよさそうだ」

お父様はにこやかに言っているが返す言葉がなかった。
しかし、よく考えてみれば悪いことではないのかもしれない。
こちらにいれば元皇太子妃候補のいき遅れと後ろ指をさされ、することもなく過ごすのだ。ストライフに行けば、やるべき仕事がある。わたしがオーランシュの皇太子妃候補だったと知る者はすくないだろうし、年齢だって表立って公表しなければなんとかなるのではないだろうか。
それに、彼に会えるかもしれない……。
「わかりました。そういたします」
わたしは静かに頷いた。

09　わたしと彼

訪問を告げられた時は心から嬉しく思った後、一国の王をもてなすことに平静さを失った。しかし、おろおろと準備している間に彼は自室まで来てしまった。自室の扉をノックはしてくれたが返事も待たずに開けて部屋に入ってきた時、わたしはちょうど髪を結い上げ直している最中で鏡越しに目が合う。一気に心拍数が上がり頬に熱が上がった。こんなはしたないところを見られるなんて！　「淑女のモラル」にはこんな時どうするべきか書いてあったかしら！？

「あ、あなた！　ソフィー様のお部屋に勝手に入ってくるなんて……なんてなんて礼儀知らずなのですか！！」

わたしが言い返せないでいる間にアリスがくるりと後ろを向いて大きな声で叫ぶ。彼の後ろにいる老執事が顔を青くしたのが見えた。きっと陛下の後を何とも言い難い顔でついてきたのであろうベルナールはなんだかぐっと老けて見えた。

そうか、アリスは彼がどんな人なのか知らないんだったわ。アリスの礼を欠いた発言を物ともせずに彼はさっと様子をうかがってから頭を下げた。

「失礼した。会ってもらえないのではないかと思ったので押しかけてしまった。淑女には身だしなみを整える時間が必要なことを失念していた。わたしは別室で待たせていただくこととしましょう」

彼は身を返し部屋を出ていく。その優雅な身のこなしに少しだけ見惚れてしまった。こちらを向いたアリスに心の内を悟られないように平静を装う。

「今のお方はストライフでソフィー様がお会いしていた方ですね。一体何者なんですか？　ソフィー様のお部屋に勝手に入ってくるなんて。まるで夫の君にでもなったかのような振る舞いですわ。私が後で一言申させていただきますわ！」

アリスがわたしの髪を整えながら息巻く。夫の君となる彼を想像して再び頬を染めてしまったが、アリスは鏡の向こうで眉を上げただけで何も言わなかった。いつもより少しだけ華やかに髪を結ってもらった後、思い出してアリスに告げる。

「そうだったわ、アリス。彼は何者かという話だったわね。あのお方は隣国・ストライフ王国の国王陛下でいらっしゃるクロード・ストライフ・バシュロ・ナルカン様よ。わたしも昨日知ったのだけれどね」

わたしの言葉にアリスが息を飲んだのがわかった。そうして、先ほどのベルナールのように顔を青くする。アリスの慌てる様子が少しだけおかしかった。

「でもきっと大丈夫だと思うわ。彼はそういうことに頓着するようなお人ではないみたいなの。あなたをどうこうしようなんて思っていないと思うわ」

ほほ笑みながら言うと、アリスは目を見開く。一国の王がそのような人だとは誰もが思わないのだろう。

「ストライフに来ることになったのか。では名所を案内しなくてはいけないな」

「そ、そんなことをあなたにさせるわけには行きません！　場所さ

え教えてくだされば、行けますわ」
「そうして誰かと行くというのか？」

身支度を整えてから陛下の待つ応接室に向かった。リュドヴィック殿下とは「淑女のモラル」にのっとって二人きりになることがないよう計らっていたアリスが今回は部屋に入らず、今は陛下と二人きりだ。無礼を働いたと思っているアリスはきっと彼の前に出るのが嫌だったんだろう。職務怠慢のような気がするけれど。

当たり障りのない会話から、今朝、父と話した内容に移った。ストライフにわたしが行くことになったと話したところで彼の目がキラリと光った気がした。そうしてこの会話となったわけだ。

「そうですね。あちらには友人もいませんし、きっと侍女を連れて行くことになると思いますわ」
「それは危険だ。やはり私と行くのが最善だろう。そうすれば、安全だし快適に回れるはずだ」

一緒に名所を回るところを想像すれば楽しくなることしか思いつかないし、それができたらともちろん思う。こうして彼と向き合って話をするだけで楽しいのだから、いろんなところを一緒に見て回るとなるとさらに楽しいに決まってる。

「ですが、陛下」

陛下と呼んだ途端、彼の楽しげな雰囲気が一変する。先ほどまで穏やかだった瞳が俄かに強い輝きを放つ。徐に席を立つとわたしの隣りに腰かける。彼との距離がぐっと近くなる。

「昨日、あなたは私と対等にあると約束したはずだ。そうだろう、ソフィア」

言いながら両手で私の両手をぎゅっと包み込む。彼は今日は手袋をはめておらず、彼の体温が直接伝わってくる。恥ずかしくなって視線を合わせられなくなり俯いた。

「ソフィア、こたえるんだ」
「もちろんです、陛下」
「陛下と呼ぶのは対等とは言い難いだろう」
「ですが……なんてお呼びしろと言うのですか？」

そう、ずっと思っていたのだ。対等であると約束はしたけれども、それはとても難しいのだ。呼び方だって、言葉遣いだってどうすればいいのかわからない。思い切って彼の瞳をまっすぐに見返しながら問いかける。

「クロード、と」

彼の瞳から鋭さがなくなり、柔らかな色をたたえる。切望するようなその口調とわたしの手を包む熱に、彼の意のままに名前を呼んでしまいそうになる。

「そんな！　いけません。ダメです」

慣れない状況に混乱しそうになる頭の中を叱咤して反論する。

「リュドヴィック殿下のことは愛称で呼んでいたはずだろう？」
「だって、殿下とは付き合いも長いのです」
「私たちも長い付き合いになる。さあ、呼んで、ソフィア？」

何を根拠に……と思ったけれど、きっと彼ほど面倒見が良くて心

配性なら、わたしがストライフに移ったら何かと面倒をみようとするに違いない。
彼は早く呼ぶようにと期待を込めた眼差しを向けている。そこに先ほどまでの鋭さがなくなったのはきっとわたしが彼の名を呼ぶとわかっているからなのかもしれない。

「く、クロード様」

俯いてそう呟くと、彼の手に包まれている手元が視界に入った。わたしの手を包んでいた大きな手がゆっくりと動く。片手がわたしの頬に触れると、そっと顔を上に向かせ視線が外れないようにとわずかな力で押さえられる。彼の触れている頬がとても熱い。彼の熱のせいなのか、自分の顔が赤くなって熱いのかわからなかった。

「もう一度」

甘い声で彼が求める。そうしてまたわたしは小さな声で彼の名を呟く。

「クロード様」

同じやり取りを何度かするうちに、恐怖や悲しみなんて感じていないのに、まぶたに涙がにじんでくるのがわかった。熱に浮かされてわたしはどうにかなってしまったのかもしれない。

「では、約束するんだ。私とストライフを見て回ると」

熱に浮かされたわたしにはそこで彼の望みに否と答えると言う選択肢など思いつくはずもなく、静かにうなずいた。彼の望みはわたしにとっても望んでいることなのだから、少しの間なら周囲のこと

を忘れても悪くはないはずという浅ましい思いを感じた。
わたしが頷いたのを見たクロード様はうっとりするような笑みを向け、わたしのとの距離を詰める。あっと思った時にはわたしは彼の腕の中だった。先ほどまで感じていた浅ましさが弾けとんで真っ白になった。

「このままストライフに連れて帰りたいものだ」

耳元で彼の甘い声がする。昨日のように体中から力が抜けていってしまいそうだ。

「わかっているのか、ソフィア。私がどれだけあなたに焦がれているのか。
ソフィア、あなたはこれから本物の恋を知るんだ」

このままでは自分の熱と、彼の放つ甘い熱に蕩けてしまうのではないかと思った。クロード様の言っている意味を考えることもできなくてただ、わたしは彼の胸の中でその熱に包まれていた。

「このままここにはいられないな。ソフィア？」

クロード様はそう言うとわたしを腕から解放される。部屋は適温に調整してあるはずなのに、彼の腕を離れると少しだけ寒く感じた。気遣うように顔を覗き込むクロード様は声と同じ甘さを瞳に秘めていて、その瞳に見つめられるだけで、先ほど感じた寒さを忘れることができた。

「わたし、大丈夫です。でも、なんだか力が入らなくって」
「また無理をさせてしまったな。昨日のように部屋まで運びたいところだが、もう行かなくては」

ああ、彼が行ってしまう。そう実感した途端、何とも言えない感情で胸がいっぱいになる。

「そんな顔をするな。行けなくなるだろう」

彼はそう言ってクスリとほほ笑むと、わたしのまぶたをその指で拭う。知らず涙が溢れていたようだ。そうして、立ち上がる彼をわたしは見上げる。

「全く弱ったものだ。また会える。いや、必ず会いに行くから待っているように」

わたしを見下ろす形で視線をあわせて言うと、彼は腰をかがめる。彼の顔が近づいてくるのがわかった。自然と瞳を閉じると、唇に柔らかなものが触れた。そうしてすぐに離れて行く。

「次はストライフで会おう。では失礼する」

そう言うと彼は颯爽と部屋を後にした。

わたしは侍女のアリスが部屋に入ってきて大騒ぎするまでずっと口元を押さえたまま扉の向こうを何をするわけでもなく眺めていた。

10　わたしの新生活

ストライフに移って二週間。だいぶ仕事にも慣れ、日々の生活のリズムもできてきた。

クロード様に会った日からストライフに移るまでの約二週間はそれは忙しいものだった。だから、彼との会話や口づけの意味を考える余裕がなかった。こちらに来てからは毎日に慣れるのに忙しく、少しずつ彼の熱が薄れていく日々を物悲しく思うようになっていた。あれから彼と会うことは叶っていない。彼のことだから約束を違えることはないと思うけれど。

この生活に慣れてきて余裕ができた今、胸の内を占めるのは彼のことだった。彼を想い胸が切なくなるのは、彼の熱が薄れていくのと反して大きくなっていった。

あの会話の意味を、口づけの意味を、そう考えていいのだろうか。

「ソフィー様、唯愛様からお手紙が届いていますよ。ご覧になりますか」

「まあ！　本当？　もちろん。唯愛たちはどうしているかしらね」

こちらに来る前に、唯愛たちとは和解と言うか、なんというか、彼らからは謝罪を受け、わだかまりはなくなっている。ストライフへ移住する準備に追われるわたしに毎日のように手紙が届き、返事を送ってはいたものの、二人で王城を抜け出して邸まで来た時は開いた口が塞がらなかった。

唯愛は騙すようなことをした、わたしから殿下を奪ったと泣きながら詫び、殿下は長年婚約者候補として都合よく扱った上に不当なやり方でその立場を奪ったと頭を下げてくださった。だけれど、わたしは彼らのことを祝福していたし、この忙しい毎日の中でそれはあっという間に過去のことになっていた。そして、忙しさの中思い

出すことと言えばクロード様のことばかりだったので、二人の謝りように不意を衝かれた。私がいつまでも言葉を発しないために彼らはずっと頭を下げたままの状態が続き、見かねたアリスが「ソフィー様！」と声をかけなければ、もしかすると日が暮れるまで彼らは頭を下げたままだったかもしれない。

「あの結婚式の日、バルコニーにいるお二人を見た時からほとんどのことは許しています」

わたしの言葉に二人が徐に頭を上げる。わたしがその場を取り繕うと心にないことを言っていないかと四つの瞳がじっとわたしを見ていた。

「わたし、過去にいつまでも縛られているような女じゃありませんわ。

殿下とは長い付き合いだったというのにわたしのことをどう思われていたのか知りませんけれど。

それにわたし、もうすぐストライフへ赴きますの。いつまでもあなたたちのことを考えているほど未練がましくはないのですわ」

殿下にいつもの調子で答える。すると殿下は一瞬ニヤリと笑う。なんだか唯愛が来てから本当に人が変わったようだ。人当たりの良い笑みばかり浮かべていたのに、今ではいろんな表情を見せる。きっとそれは唯愛がいるからなんだろう。そう思うとますます二人を祝福したいと思ったし、わたしもいつかそんな人に出会えるだろうかと胸が膨らんだ。

なんだかんだで三人で話しこみ、晩餐の後もしばらく滞在して二人が帰って行ったのはもう夜も更ける頃だった。

唯愛の書く文字は相変わらず少しだけ不格好で、それを眺めているだけで笑みが漏れそうになる。手紙は三日と置かず届き、彼女が王城で暇を持て余しているのがわかった。今では皇太子妃だ、そう簡単に外出もできないだろう。今日届いた手紙にはギャロップができるようになったのに岬に連れて行ってもらえるようすがないと書かれている。唯愛が頬膨らましながら不平を募らせているのが目に浮かんだ。

俄かに廊下が騒がしくなったのは唯愛からの手紙の最後の一文を読もうとした時だった。部屋がノックされたが、返事をする間もなく扉が開く。そこには久しく会うことが叶わなかったクロード様がいた。手元からパサと手紙が落ちていく。会いたいとは願っていたが予期しない人物の登場に彼を見つめたまた固まってしまった。

彼は後ろ手に扉を閉める。

「ソフィー様！　このお方はどなたなのですか！　扉をお開けください！！」

扉の向こうでオーランシュから連れてきた執事のエドワールが扉を叩きながら叫んでいる。一大事だと思っているに違いない。彼は実家の老執事、ベルナールの孫にあたる。彼について仕事を学んできたが、執事となって日も経験も浅いのだ。随分取り乱している。

「ようやく会えたな」

クロード様は扉の向こうの喧騒などどこ吹く風で、わたしのもとに歩み寄る。彼のほほ笑みを見てようやくわたしも彼が幻ではないと悟る。

「クロード様！」

慌ててわたしは立ち上がると、膝を折った。母国の皇太子妃にはなれなかったが淑女としてのマナーは忘れてはいけない。

「また陛下などと呼んだらどうしようかと思っていたんだがな」

彼はわたしの手を取るとニヤリと人の悪い笑みを浮かべた後、流れるような動作で手の甲に、そして手の平に口づけを落とした。一気に心拍数が跳ね上がる。恥ずかしさから手を引こうとしても、離してはもらえず、手をひかれてソファに腰をおろすよう促された。クロード様は丁寧に手紙を拾ってくださり、テーブルに置くと、わたしの隣りにぴったりと寄り添うように腰をおろした。いつの間にか扉の向こうは静かになっていた。

「彼はようやく私を誰だが認めてくれたようだな。なかなか忠実な執事だ」

「エドワールのことですか？」

「私がちゃんと名乗っても取り合おうとしなかったから無理やり押入ったんだ。途中であなたの侍女に会って案内してもらえなければ、あなたに会えなかったかもしれないな」

「まあ！　そう言えば前回も無理やり押入りませんでしたっけ」

「あなたに会いたい想いがそうさせるんだから仕方がない。無事に会えてよかった」

私の手は未だ彼の手の中にあり、言いながら彼が強くわたしの手を握りしめた。わたしも会えたことが嬉しくてほほ笑みながら手を握り返した。

「いつお会いできるのかと思っていました」

「それは悪かった。少しは私と会いたいと思っていてくれた？」

少しではない、とても会いたかった。想いを言葉にしていいのか少し迷ってしまった。対等に在りたいと彼は事あるごとに言っているが、こんな想いを伝えていいのだろうか。迷った末に首を縦に振る。これだけでわたしが想っていることが全て伝わればいいのに。

「時間をおく必要があったんだ、すまなかった」
「いいえ、だって、あなたは一国の王ですもの。忙しくて当然ですわ」
「そんなに忙しいわけでもないんだ、周りが優秀だからな。ただ……」

彼にしては珍しく歯切れが悪い。何かよくないことでもあったのだろうか。首を傾げて先を促す。

「そのような仕草を他の男の前でも取っているのか？」
「え？」
「全く。これでは時間をおいた意味がないな」
「お会いできなかったのはわたしのせいですか？」
「いや、私のせいかな」

穏やかに話す彼の手はいつの間にかわたしの頬をに移り、優しく撫ぜる。彼に触れらると心臓が大きく脈打ち出し、触れられた部分がすぐに熱を持って赤くなってしまうのに、それと同時に心地よさと安堵を感じる。そっと瞳を閉じて彼に頬を撫ぜてもらう。そうして、どれだけわたしが彼を信頼しているのかを感じた。

「あなたのせい？」
「そう。歯止めが利かなくなってしまうから」
「歯止め？」
「あなたに触れるのを止められなくなりそうだ」

彼の声が耳のそばで聞こえてパチリと瞳を開ける。その瞬間、わたしはクロード様の腕の中にいた。力強くわたしを抱きしめるクロード様にドクドクと音を立てる鼓動が伝わりそうなくらいわたしたちは近づいている。それが嬉しかった。そのまましばらくわたしたちは抱き合っていた。

徐に扉がノックされ、彼が離れていく。それでも近くにいるというのに何とも言えない寂しさが募る。感情が表情に出ていたのか、クロード様が苦笑をもらすのがわかった。それを見てすぐに我に帰る。今のはまるで、抱擁を強請っているみたいではないか。クロード様がご帰宅されたら「淑女のモラル」を読み返して、それから書写しよう。わたしったらまるでなってないわ。

扉を開けて入ってきたのはアリスだった。お茶のワゴンを押している。テーブルのそばにワゴンを置くと静かに礼をして部屋を出て行った。お茶も出さずにお相手をするなんて、随分な失礼を働いていたようだと立ち上がる。

「私がやろう。こう見えてお茶を入れるのが得意なんだ。あなたはここに座っているといい」

初めて会った時のように彼はお茶を淹れてくれる。わたしもお茶を淹れるのはうまくなってたと思っていたが、彼の淹れるお茶は侍女たち顔負けだ。

「おいしい、クロード様は初めて会った時もお茶を淹れてくれましたね。あの時もすごくおいしかった」

「あなたが喜ぶならいくらでも淹れよう」

お茶を淹れた彼が再び腰をおろすと、会っていなかった間の話をしたり、仕事の話をして楽しい時間を過ごした。不意に触れてくる

彼の指先に鼓動が乱れるのに、彼と過ごすと心が安らぐのだから不思議だった。

その訪問から、彼はたびたび会いに来てくれるようになった。一国の王が城を抜け出し、他国の貴族の娘と頻繁に会っていても問題はないのだろうか？　と疑問に思っていた。そう思いながらも彼の訪れを楽しみにしていたので、口に出してそれを聞くことはできなかったけれど。

クロード様のアドバイスを時々いただいて仕事も順調、唯愛から来る手紙や、クロード様の来訪があり日々の生活も楽しかった。異国の小物を部屋に飾るため、新たな貿易の商品を探しに、クロード様とマルシェへ赴くことも会った。王だというのに彼は城下の者たちと普通に話す彼を見て、民に慕われているのだと感じた。

わたしたちはいつまでこんな穏やかで甘い時間を過ごすことができるのだろう。

11　陛下とわたし

「クロード陛下が婚約を発表するらしいですね」

それをわたしに告げたのは執事のエドワールだ。一人の食事は寂しいからと言って身近な使用人たちと一緒に取っている、その席で彼が告げた。

「まあ！」

アリスは瞳を輝かせたが、わたしはあまりの衝撃に言葉も出なかった。彼は昨日もわたしとお茶をともにし、いつもと変わらず楽しい、胸の高鳴る時間を過ごしていった。その時、そのような素振りは一切見せていなかった。

「一体どんな方と婚約を発表するのでしょうね。全く」

「それは、もちろん、決まっておりますわ！」

憎々しげに言うエドワールとは対照的に、アリスはキャアキャアと食事の時のマナーも忘れて興奮気味に何やら話している。アリスにはクロード様の婚約者にあてがあるようだった。だけれど、そんな言葉も耳に入らないほど動揺していた。ずっとずっと続くと思っていた彼との関係が終わってしまう。そう思うと、食事も味気のないものに変わってしまった。

「わたし、先に休むわね。アリスももう今日は休んでいいわ。自分でできるから」

「ソフィー様？」

怪訝そうなアリスに答えることなく自室に戻った。早々にベッドに潜り込む。涙を止めることができなかった。
何を期待していたのだろう。
彼は一国の王だ。
いつか妃を娶るのだ。
異国の一貴族の娘がどうこうできるお方ではないのだ。
なにか約束の言葉をもらったわけでもないのに。
年若い娘でもないのに、どんな甘い夢を見ていたというの。

次の日、起きると泣きながら寝たせいか体が重かった。喉も痛い。アリスの勧めもあって一日ベッドで大事を取ることにた。午後の早い時間にエドワールからクロード様の来訪を告げられた。彼が二日続けて会いに来るのはこれが初めてだった。昨日の話を思い出し、もう会えないと言われるのだろうかと想像すると鼻の奥がツンとする。悟られない様に体調を理由に面会を断るようエドワールに伝えた。しばらくしてから、彼が部屋に押し掛けてくることもなく邸を後にしたとエドワールから報告を受けた。心の中が索莫としていくのを感じた。
体調を崩したらしいわたしはその後三日間をベッドの中ですごした。驚くべきことに毎日のようにクロード様の来訪があったけれど、会う勇気が出せず、面会を断っていた。

「ソフィー様、少しこの街を離れてはいかがです？」
そう進言してきたのはベルナールだった。あまりにも塞ぎこむわたしを不憫に思ったのだろう。
「そうですわ！　もう体調はよいのですし！　きっと慣れない生活の疲れが出たのですわ。気分転換をされてはいかがです？」

「街を離れるにしても、わたし、この国では知ってる場所なんて全然ないもの」
「では、カーク神殿はいかがですか？　私、あの神殿なら気分転換にぴったりだと思いますわ！」
「そうですね。あそこは緑も豊かだしいい気分転換ができるのではないでしょうか」
「……そうね、明日から行ってみようかしら。わたしがいない間の仕事はエドワールに頼むわね。問題ないでしょう？」
「ええ、お任せ下さい。最近は問題も起きていませんし、ソフィー様がいない間しっかり管理いたします」

カーク神殿に来るのは初めてではない。数年前にリュドヴィック殿下と来たことがある。その時はまだ彼に想いを馳せていて、きれいな夕陽を眺めながら彼と結ばれることを願ったことを覚えている。
同じ夕陽を見つめながら今想うのは違う男性のことだ。あの頃、自分がリュドヴィック殿下以外の人を想うことになるなんて想像もしていなかった。だけれど、その想いも叶うことがなさそうだ。そう思うとエドワールに噂を聞いた日から心を覆う索莫感が一層と強くなる。夕陽が沈み切り辺りが暗闇に包まれていくのを見てまるでわたしの心のようだと感じた。小さく息を吐いた後、神殿に向かった。
神殿には宿泊施設がある。豪華ではないが清潔に整えられている一室を借りたのは昨日のことだ。ちょうど日が沈むころに神殿に到着し、夕陽を眺めた後、神殿で宿泊の許可をもらった。早く邸に戻ろうと思ってはいるが、心が凪ぐまではもう少しかかりそうだ。今まで頑張ってきたのだから、ここで少し休んでもいいだろうと自分を甘やかす。辛い時に頼りたい人にはもう頼れなくなるのだから。
何をするでもない日々を神殿で過ごした。古の建物を見て回った

り、歴史書を読んでみたり、神殿の手伝いもした。そうして夕陽を眺めては想いの届かない彼を想い溜息と少しの涙を流す。こうしてはいられないのだと思ったのは一週間を過ぎた日だった。

今日の夕陽を見るのが最後だ。そうしたら邸に戻って、彼が訪ねてきた時にはしっかりと対峙しよう。もう会いになんて来てくれないかもしれないけれど。一国の王があんなにもわたしに心を砕いてくださっていたのに最後は失礼なことをしてしまった。あのような態度は「淑女のモラル」に反していたかもしれない。何年もこの本を読み続けているのに立派に淑女にはなれそうにない。

大きなため息をついて部屋に戻ろうと踵を返した時だった。

不意に辺りが騒がしくなる。神官たちがおろおろと行き来したり、地位の高い神官たちは神殿の入口に集まっている。誰か要人が訪れたのかもしれない。失礼のないように部屋にこもっていた方がいいだろう。足早にその場を後にしようとした時、強い視線を感じて振り返る。

そこにはいるはずのない人がいた。

「……クロード様」

そう言い終える頃には彼はもうわたしの目の前にいた。その瞳は鋭い色をたたえてまっすぐにわたしを見つめている。その視線を反らすことなく彼はわたしの手を取ると、地面に片膝をついた。そうしてゆっくりとわたしの手の甲に口づけをする。

「お久しぶりです。ご機嫌はいかがですか？」

彼の問いに何も答えられず立ち尽くす。

「今から言う、私の願いを叶えてはくれないでしょうか。ソフィア・ムーレ嬢、愛しいソフィア。

どうか私の妻になってください」

まっすぐな瞳がわたしを射る。

「だって、だって、あなたは近く婚約発表をするのでしょう？」

夢だ。

これはきっと都合のよい幻想だ。

夢から目が覚めたらきっといつものように胸が真っ黒に塗りつぶされるのだ。

「ええ。あなたとの婚約を発表したいと思っています」

「うそよ。だって、一度もそんな話をしてくださらなかったわ」

「話はしていなくとも、想いは伝わっていたと」

「だめよ。だって、だって」

突然の出来事に混乱してしまう。これが現実だったらどれだけ嬉しいだろう。でもここは彼の城から遠く離れたカーク神殿だ。そこに彼が現れるなんて信じられない。

混乱するわたしを見かねて彼は立ち上がると呆れた顔をする。

「もう黙って」

そう言うや否や彼の唇がわたしの唇に重なってなにも考えられなかった。

そんなに長い時間ではなかったのであろう口づけは、わたしにとっては数時間に及ぶようなものに感じて、彼の唇が離れていく時には立っていられなくなる。そうして彼に抱きしめられる。いつかもそうしてくれたと頭の片隅で考えるだけの余裕があったのはちょっ

とは成長したということなのだろうか。

「プロポーズの答えを聞いてもいいだろうか？」

わたしを抱きしめたまま彼が言う。コクリと頷く。腕をわたしに回したまま少しだけ二人の間に距離を開けて、彼が鋭さのなくなった瞳でわたしを見つめる。

「王妃になんてならなくていいんだ、私の妻になってくれればそれでいい。

ソフィア、君を愛している。

結婚してくれるか？」

「わたしでいいのですか？」

「もちろん、あなたではなくてはダメなんだ」

「わたしもあなたを愛しています、クロード様」

わたしがそう言うと、彼はこれまで見たことのない蕩けるような笑みを浮かべた後、ぎゅっとわたしを抱きしめた。その腕に喜びと安堵が沸く。わたしも恐る恐る腕を回し彼に抱きつく。そうすると彼との間にはなにも隔たりがないように感じて、鼓動が一つに溶け合うようなきがして、悲しくなんてないのに目頭が熱くなった。

「あなたは良く泣くな」

クロード様が笑いながら涙を拭ってくれた。

12　THE　OTHER　SIDE　01

私の人生を言葉にして表すのであれば――

最初の五年は幸福。

私はストライフ王国、バシュロ・ナルカン家の一員として生まれた。父はこの国の皇太子で、四人の子に恵まれた。私が四人目で唯一の男児だった。王宮で家族や家臣に慈しまれ平穏な日々を過ごしたことを遠い思い出として覚えている。

次の十年は地獄。

幸せはある日突然に姿を消す。遠縁の狡猾な男の貼りめぐらした巧妙な罠にかかり祖父である国王が倒れる。その後、信じられないことに父が弾劾される。なんとか着の身着のまま王宮を抜け出す。城から離れた父の領地に向かうも、そこもすでに包囲されており、そこで両親が倒れた。残された姉たちと耐え忍びながら逃げる日々。生きる術を持たなかった我々には次の日の朝を迎えることも難しい毎日。王族としての誇りはすぐになくなった。

それからの三年は諦観。

祖父が即位していた頃には固く禁じられていた人身売買の商人につかまり、売り払われる。姉たちとはそこで生き別れた。今も消息がつかめない。過酷な肉体労働を強いられる日々に、抵抗する気力すら失っていく。無気力に命令に従い、このままここで命が絶えるのだと思うことが何度もあった。

しかし、人には転機というものが必ずある。

逃げ出すチャンスが巡ってきたのだ。過酷な肉体労働に耐えかねた労働者たちの反乱だった。その隙をついて私はそこを抜け出した。

しかし、行くあてなどどこにもない。姉がどこにいるのかもわからない。王族としての誇りすら失われた自分に生きている意味など見出せなかった。このまま……そう思った時に私の手を取る者がいた。一緒に働いていた男の一人だ。私よりも随分と年上の体格のいいその男によって、反乱が起きたことを無気力ながらにも認識していた。

彼は言った。

「俺についてこい」

その一言と、力強い手、それだけで十分だった。

次の七年は再起。

その男の名はジャコブ・サルヴェールと言って、私をカーク神殿へ連れて行った。そこには秘密裏に反乱を起こそうとする者たちが集まっているということだった。あの男を討つ。そんなことをしても祖父や両親はかえらない、せめて、生き別れた姉を探そう。私は反乱軍と呼ぶには小さすぎる勢力になんら興味を持てなかった。

当時、私には栄養が不足し体がとても小さかった、筋肉と呼べるものもなかった。しかし、栄養を取り戻し、姉たちを探すことに備え体を鍛えることに成功し、見違えるように成長した。また、学ぶことができなかった日々を取り戻すがごとく勉学に励んだ。

反勢力は数年の間に多くの同志を得ていた。しかし、思うように進まない作戦、資金の調達に勢いは徐々に失われつつあった。ジャコブはこの勢力の中の古参で重要な役割を担っていた。彼に助けられた私は彼らに大きく加担するわけではないが、知恵を貸すくらいのことはしていた。成長とともに王族としての誇りも取り戻してはいたが、自らそれを名乗ることはなかった。

そして王権を討つまでの五年は不屈。

ある日、事態は進展する。

カーク神殿に若いがキレ者と有名な隣国の皇太子が訪れたのだ。オーランシュの皇太子が婚約者候補と共にこの国を訪問しているという話は聞いてた。オーランシュとの境には山もなく、国境を越えるのが容易い。国を捨てる人々が隣国を目指し、国境には難民が溢れていた。その件についての苦言を呈するためだというのが我々の見解だった。

予想しない皇太子の訪問に反勢力のメンバーたちは混乱を呈していた。反勢力として彼と接触するべきか否かもめているようだった。

オーランシュの皇太子がやってきた日、私は運命的な出会いをしていた。出会いと言っても私が勝手にその女性を一方的に見ていただけだが。

夕陽を眺める無垢な横顔に心を打たれ、知らず涙が流れ、彼女が屋内へ入るまでひたすらに見つめ続けた。彼女は一度も私に気付くことはなく、その隣に佇むオーランシュの皇太子に優しく微笑みかけていた。私に向けられるでもない笑顔に心を躍らせると共に、その笑みを向けられないという現実に酷く焦燥した。そして、彼女を手に入れたいと渇望する自分を見つけた。王宮を追われてから約二十年、その間こんなにも何かを欲した自分はいなかった。彼女を腕に抱き、その笑みを向けてもらわなければ……！　私の中に忘れたはずの熱い思いが蘇り、高揚感が体を駆け巡った。私はその時、反勢力の大義として名乗り出ることを決意した。

ジャコブに本当の名を明かし、現王を一刻も早く討ちたいと熱く語った。一部の権力者だけが優雅な暮らしをし、それを支えるために民が苦汁を舐める日々など即刻終わりにしたいと。その気持ちに嘘はなかったが、私を動かしていたのは彼女を手に入れたいという想いだった。

大義となった私は、瞬く間に反勢力の頂点に祭り上げられた。それにはジャコブら古参の者たちも納得しているようでようやく憎き王を打てると息巻いていた。

次の日の夜、オーランシュ皇太子との密談を設けることができた。

私と彼だけの腹の探り合いだ。その中で私は酷い約束を取り付けた。先ほど見た彼女の笑顔や意思を考慮しない、反勢力のことすら顧みない独善的な取り決め。

オーランシュから王権を打つためには支援を頂戴しないこと。

私が王となった暁にはソフィア・ムーレ嬢を王妃に据えること。

オーランシュの皇太子も当初は難しい顔をしていた。だが、私には後ろ盾がないことや、両国間の関係を強化したいなど言い募ることでしぶしぶながらも約束を交わすことができた。

あの笑顔を見れば彼女が皇太子を想っていることは間違いないだろう。それでも手に入れたいと思ってしまった。私に微笑みかけてほしいと思ってしまった。

それから現王を打つまでは未だ遠い彼女の笑顔を想い続けた。

その後、無事に王座に着いたもののオーランシュが約束を違えない自信はなかった。彼女は未だ皇太子の婚約者候補だった。手に入れたい気持ちは募ったが、彼女を無理に手に入れることであの笑顔を失ったらと考えると迂闊に行動を起こすこともためらわれた。

そうして、オーランシュ皇太子の婚約発表だ。噂を聞いた時は、やはり約束は違われたのだと愕然とした。しかし、皇太子より届いた招待状にある皇太子妃の名はムーレ嬢ではなかった。私の体を歓喜が駆け巡った。招待状の下には走り書きで一文が添えられていた。

「お膳立てはしない」

彼女が手に入る！

私は意気揚々とオーランシュへ赴く準備を始めた。

あの日街へ出ていたのは偶然だった。オーランシュへ行く前に街の様子を確認しておきたかった。生まれは王族と言ってもそれからは奴隷のような暮らしを強いられてきたのだから、街にいる方が気が楽だった。馬に乗って市街を回る。街や民に活気が戻ったのは喜ばしいことだ。このまま良い治世を進めよう。優秀な部下たちがいれば大丈夫だ。

もうすぐ、彼女も手に入る。

そう思った時に見覚えのある女性が視界に入ったのはきっと必然であろう。あの想い続けたムーレ嬢が今にも泣きそうな顔をして佇んでいる。五年前と変わらない美しさ、幻かと思った。彼女が消えてしまわない様に、そっと、慎重に近づく。

「あ、」

声をかけようとしたした瞬間彼女が顔を上げて愛馬を見やる。小さく可憐な声を出した後、一気に涙腺が崩壊する。彼女の天色の瞳からポロポロと大粒の涙が零れおちる様にただ見惚れてしまった。しかし、彼女は顔を背けると一気に駆けだす。ここで彼女を逃したら二度と手に入れる機会は巡ってこない気がした。

「あ、待て！」

そうして私はソフィアを手に入れるために動きだした。

13　THE　OTHER　SIDE　02（前書き）

お願い……！　怒らないで！！
みんな、冷静に読んでね！！

13　THE　OTHER　SIDE　02

僕の名はリュドヴィック・オーランシュ・ジルベルスタイン。オーランシュ王国の皇太子だ。先日、妃を娶ったばかりの幸せ者だ。まあ、一部の国民、特に婦女子の皆さんから「人でなし」と言う愛称で呼ばれているのも知っている。結婚するまではこの国に女の敵なんていなかったからとても残念だなぁと思っている。

なぜ、僕が「人でなし」と言われているかなんだけれど、僕には長年、婚約者候補がいた。僕の指南役を務める大貴族、シリル・ムーレの娘のソフィア・ムーレだ。彼女は僕がこの世に生まれた時から婚約者候補だった。

僕の瞳と似た色をしている天色の瞳はいつも穏やかな色をたたえているが、彼女が注意深く周囲を観察していることを知っていた。白菫色と言われて小さな少女たちから憧れられている長い髪はいつもきちんと結い上げられていて、その白い項に魅了される貴族の子息も少なくない。小さな頃はふわふわとしたその髪をおろしていて、彼女に良く似合っていたのを覚えている。またおろしたところを見たかったなぁ。きちんと結い上げているよりおろしていた方が彼女の雰囲気に似合っているんだよなぁ。彼の人はもう知っているのかな？　ああ、まあ、とにかく、彼女は模範的な皇太子妃候補で、品行方正を形にしたような人だった。

そんな理想的な婚約者候補をある日突然捨てて、別の女性と結婚してしまったことで「人でなし」の愛称を得ることになってしまったんだ。

一般的にはある日突然と言うことになっているけれど、僕の中では随分と前から決めていたことだから、非難されても仕方がないと割り切っている。それに多分、ソフィーはきっと僕と結婚するより幸せになれると確信している。だからちょっとの間の悪い評判は割り切るつもりだ。

僕よりも二歳年上のソフィーが何年か前まで僕に淡い想いを抱いているのは知っていた。もちろん、僕だって彼女をいいなと思っていた。彼女はあの通り魅力的な女性だからね。まあ、彼女に知られない様にちょっとは遊んだりしたけど、それは男なのだから仕方ないでしょう？　今は、奥さん一筋だしね！　話が反れたね。彼女をいいなと思っていたけれど、結婚することに対して僕は後ろ向きだった。

僕は皇太子だ。だからみんなの思う理想的な皇太子と在るべくずっと振舞っていた。それについては、ソフィーもずっと理想的な皇太子妃になるべく振舞っていたから、彼女を同志だと思っている。そう、僕らはずっと周囲の望むがままに演じていた。だけど、僕だって人間だ。いつからか、それに答えることに嫌気がさしていた。へらっと笑って書類に印を押しているだけの人形になんてなりたくなかった。それに時々、ソフィーが僕自身をみているのか、皇太子であるリュドヴィックを見ているのかわからなくなることがあった。彼女に野心があるとは思えないけれど皇太子妃や王妃になりたいだけ？　そう思ってしまう時があったのは確かなんだ。

ソフィーとの婚約を後回しにしていたのは、僕なりの意思表示だった。

僕たちの関係に決定的な変化が起きたのは五年前に隣国、ストライフのカーク神殿に行った時だった。ストライフには国王の使いとしてソフィーと共に赴いた。これは、ソフィーを皇太子妃として扱っているようなものだったけれど、その時だって彼女と結婚する気はなかった。このままソフィーの結婚適齢期が過ぎたらもう娶るしかないのか、ああ、にっちもさっちもいかないなぁ、こんな僕と結婚していいわけ？　そんなことを考えている時期だった。

無事に国王との謁見が済んで、国境付近の難民について丁寧な言葉で文句を言う。国王の様子から、ダメだなと思った。ぜーんぜん対応する気がないことがわかった。晩餐の席ではソフィーのことば

かり見ているし。僕は早々にストライフの王城を去ることを決めて、カーク神殿に行こうと考える。これは父王に頼まれたことではないけれど、独自のルートで入手した情報によると、そこに反勢力組織の拠点があるという。もしかすると接触できるんじゃないか、そう思った。それにカーク神殿は縁結びでも有名だから、ソフィーを連れていけば接触できなくても問題ない。とても名案だ！　名案を思い付いてご機嫌だった僕は晩餐後のパーティーでかわいい令嬢に手を出す。でも、その娘が愚王のお手付きだと知って急速に萎えているところをソフィーに見つかった時は生きた心地がしなかった。天色の瞳にうるうると涙が溜まっていく様は本当に危なかったね！　あれが私室だったら即結婚式だったと思う。

僕らは次の日早々と王城を去った。愚王はせめてソフィーだけは残れとか意味の分からないことを言っていたけれど、そこで残ると思うのかな？　全くどこまでも愚かしかった。どうしてこんな男が王座に就いているんだろう。

神殿へ続く道は馬では登れるが、馬車では登れない。馬の苦手なソフィーを連れていくためには徒歩で山道を登るしかなかった。いつまでも続く山道にうんざりしてくるが、彼女は文句も言わずについてくる。行くことを決めたのは僕だったから渋々と山道を登った。ようやく神殿にたどり着いたのは日も暮れる頃だった。反対勢力の接触を待つとなると数日は滞在しないとダメだろうななどと考えながらぼんやり夕陽を眺める。隣りのソフィーは夕陽にいたく感動しているようだ。頬を紅潮させて僕に微笑みかけてくる。ああ、ほんと、結婚した方が人生楽かもしれないと思った。

意外なことに反勢力組織とは次の日に接触できた。その夜、密談が行われる。僕と、あちらのリーダー。二人だけだ。驚くべきことに、反勢力組織のリーダーはこの国の正当な後継者である、クロード・バシュロ・ナルカン殿だった。濃紺の髪と菫色の瞳は先代のストライフ王とそっくりだ。辛い生活を強いられてきたためだろう猛

々しさや荒々しさが王族たる故の気品の影に見えた。
彼は僕に驚くべき提案をしてきた。オーランシュからは愚王を討つための支援は必要ない、でも自分が王になったらソフィーを嫁に寄こせと言ってきた。初めは開いた口が塞がらないかと思った。僕はなんとか表情を取り繕って彼の話を聞く。あーでもないこーでもないと言っていたけれど、僕は彼がソフィー名を口にする時の彼の瞳の熱を見逃さなかった。
彼女に惚れたな、そう思った。
でも、この熱はなんだろう？　数日前にに彼女はあの愚王から見初められそうになってたじゃないか。あの時と似たようなものだろ。国内の貴族の子息だって彼女を手に入れたいと思っているのを知っている。この男もそれと同じだろう？
そう理論的に考えるのに、何かが彼は違うと言っていた。
ああ、そうだ。僕は。僕もこの熱を抱くような女性に巡り会いたいんだ。僕もこの身の内にその熱を宿したいんだ。ずっとその熱を宿したいと思ってきたんだ。

「仕方ないですね。ではその条件を飲みましょう。難民の問題もあります。一刻も早く王座に返り咲いてくださいね？　あなたがリーダーなのであれば各国からの支援も得られるでしょう。
ソフィーについてはその後、考えましょう」

僕はその提案をそのまま了承した。

実のところ、このカーク神殿に来たことは僕一人の判断だったため、この取り決めも反勢力組織と接触したことも父である王にも指南役にも伝えていない。つまり、僕と彼の男の約束と言うわけだ。
だから、彼がもたもたしている間は本当に大変だった。とりあえず、無防備すぎるソフィーには「淑女のモラル」という道徳本を送った。彼女は完ぺきな淑女だけど、このちょっと偏った道徳本でお

堅くなってもらいたかった。それなのに、なんとしてでもシリルはソフィーを嫁に上げようと画策してくるし、ソフィーに至っては「淑女のモラル」読んでるの？　って思うくらいどんどん魅力的になっていてガードするのが大変だった。僕もなんど約束を違えそうになったことか……。彼の人はなにをもたもたやってたんだろうね！

あの愚王を討つのにさ。僕だったら即王座奪い返してたと思うけれど。

でも、いいんだ。

「リュド！　ソフィーからお手紙が来てるよ。一緒に見よう？」

執務を終えて私室に戻ると唯愛が笑顔で出迎えてくれる。ぎゅっと抱きしめて一緒にソファに座る。この笑顔で僕は皇太子からただのリュドヴィックに戻ることができる。ありのままの僕になれるんだ。この平凡な女の子――って言ったら悲しい顔をするから面と向かって言えないけど、でも悲しい顔も可愛い、もっと見たいと思ってしまう僕は多分末期患者だ――のどこにそんな力があるのかわからないけれど、僕をただの男に戻してくれる。もう手放すことなんてできない。僕はもう一度強く彼女を抱きしめて深く口づける。

僕の腕の中でくたっとなった唯愛と二人で隣国の王妃になったソフィーからの手紙を読む。

なんて幸せなんだろう。唯愛もソフィーもクロードもみんな幸せだ。

ちょっとの間の悪い評判は我慢する。だって、こんなに愛おしい存在に出会えたんだから。あそこでソフィーと結婚していたら、僕はきっとずっとこの熱を知らないままだった。

「唯愛、愛してる」

いちいち顔を真っ赤にする唯愛に満足して、そっと彼女を抱きしめた。

XX

拝啓　親愛なる唯愛様

お元気ですか？
お手紙をいつもありがとう。
それなのにお返事が滞ってしまっていたことをあやまります、ごめんなさい。
少し前に頂いたお手紙の驚くべきニュースにわたしも陛下も驚きとともにとても嬉しく思っています。
唯愛、リュドヴィック殿下、懐妊おめでとうございます。

これでますます外出が遠のいたわね。仕方ないのだから、黄金岬には家族三人で行ってね。
唯愛と殿下の御子が生まれたらわたしにもぜひ抱かせてください。二人の子なのだからきっととても可愛らしい子が生まれるのでしょうね。とてもうらやましいです。

話は変わりますが、ストライフ城での生活はとても快適です。
王妃としての役割にも励んでいます。最近は王妃としての仕事が多くて、ムーレ商会の仕事を以前執事として仕えてもらっていたエドワールに任せ切りです。でも、このエドワールはとても素敵な感性を持っています。彼が目を付ける小物や髪飾りの類はとても素敵なものばかりです。手紙と一緒にその中からいくつか送ります。唯愛に身につけてもらえたらと思って選んだものばかりです。身につけてもらえたら光栄です。でも殿下が許して下さるかしら？
殿下の寵愛のほどはこちらまで聞き及んでいます。二人が想い合っていることはわたしも結婚式の日に拝見して理解しているけれど、

国外まで噂が広がるなんてすごいことよね。だから、わたしが送ったアクセサリーを身につける機会があるか少しだけ不安です。
実は、あなたに謝らなくてはいけないことがあります。
あなたはいつも手紙に謝罪の言葉を添えてくれるけれど、本当はわたしも謝らなくてはいけないことがあります。
あの日、あなたと殿下の結婚を知った日、わたしは愚かにもあなたを元いた世界に返したいと思ってしまいました。そうすれば、全てが元の通りに戻るのにと。バルコニーにいるあなたと殿下を見てその思いはすぐに打ち消しましたがとても酷いことを思ったものです。そして、あなたは何度も謝ってくれたのにわたしはいつまでもそれを有耶無耶にしてきました。
本当にごめんなさい。
こんな浅はかなわたしを許して下さるのであれば、これからも仲良くしてください。
もちろんわたしはあなたのことが大好きです。

「まだ書き終わらないのか？」
ノックの後すぐに扉が開く。返事も待たずにとても大切な彼が入ってくる。
「ここは王妃の部屋ですよ。お返事があってから扉を開けるべきです！」
「私は彼女の夫の君だろう。以前何やら言っていたのはお前だろう？　お前はもうさがっていい」
部屋に控えているアリスが抗議するがそれを気にしないでクロード様が言い放つ。いつもの光景だ。アリスが頬を膨らましながら部

屋を出る。本当にどちらが主かわからないわ、もう。

「……そうか」　クロード様が背後から手紙を覗き込み、しばしの沈黙の後そう呟くと後ろからぎゅっと抱きしめられた。

「そうかってなにがです？」

どきどきしながら彼に問いかける。いつまでたってもこの胸の高鳴りはおさまらない。いつか平気で彼の腕にいられるようになるのかしら。

「ここに書いてあるだろう、御子がうらやましいと。それにここには隣国の王の寵愛のことも。私の愛情表現では足りないようだ」

「えっ……」

「それにソフィア、あなたはどうしたら御子ができるか本当に知っているのか？」

頬に熱が集まる。

「そのようなことを淑女に聞いてはいけません！　淑女のモラルにだって……」

「……以前から疑問に思っていたんだが、あの本は一体誰にもらったんだ？」

「あれはカーク神殿にリュドヴィック殿下と行った後にもらったものです。きっとわたしが淑女として未熟だったからですわ」

「ああ、そういうことか。それではリュドヴィックに会ったらあの本を返却しなくてはいけないな」

リュドヴィック殿下とカーク神殿に行った後、あの本を渡され、それから少しだけ彼と距離をあけられたのを思い出した。きっと、

あの旅の中でわたしがふさわしくない態度をとっていたのだろう。

「誰のことを考えているんだ？　あなたは私の妻だろう？　一緒にいる時に他の男のことを考えるなんて」

クロード様がわたしを椅子からすくいあげる。そうして顔中に口づけをふらす。彼のそばにいたら、いつか発熱して病気になってしまうかもしれない。

でも。

だけれど、とても幸せだ。

いつまでも彼と共にあれますように。

ＸＸ（後書き）

これでこのお話は完結です。
お付き合いいただいてありがとうございます。
なんの気なしに始めたために後半は心理描写ってすっごい難しい！
と悩みぬきました。だけれども、それなのに、なんだか中途半端になってしまったな……という反省しています。
でもたくさんの方にお気に入り登録していただき、読んでいただきありがたく思います。

ＴＨＥ　ＯＴＨＥＲ　ＳＩＤＥ　という言葉を使いたかったため別視点まで出してしまいました。
本当はソフィア視点のみでいくつもりだったんですが、これでリュドたちが少しでも救済されればなと思っています。

長々と最後に書いてしまいましたが、最後までお読みくださりありがとうございました。
機会があればまた別のお話で……。

なお

XX THE OTHER SIDE 03

私の元・主である現ストライフ国王妃のソフィア様は随分と私の能力を評価して下さっている。以前、私はソフィア様の仕事のお手伝い程度でムーレ商会の業務を任されていたが、今はストライフ支店を取り締まる立場に就かせていただいている。それもこれも、ソフィア様がこの国の王妃となり、支店の業務を担うことが難しくなったからだ。私には執事としての仕事よりもこちらの方が向いているようで、業績も右肩上がりだ。仕事の報告をする際に、手土産とし取引している工房のアクセサリーの類をソフィア様の元へ持って行くといつも大変喜んでくださり、それもまた私の仕事への熱意と変わる。

今日もまた、ソフィア様の元へ髪飾りと共に報告書を差し出した。ソフィア様は髪飾りを見て顔を綻ばせる。

「ステキね。やっぱり、エドワールの目利きはムーレ商会一だわ。アリス、これをつけてくれる？」

ソフィア様は躊躇なくこれまで付けていたものを外し、私が差し上げたガラス細工のそれを身につける。

「どう？　似合ってる？」

満面の笑みで尋ねるソフィア様に私も満足げに頷いた。

「もちろんです」

「ありがとう、エドワール。大切にするわね」

そう言って、ソフィア様は報告書へと目を落とす。
この方は自覚がない。こうして職務に就いている時や公の場では毅然とし抜け目がないというのに、私的な場面、または寄せられる感情については鈍いというか……発達に遅れを感じてしまう。旦那様や、リュドヴィック皇太子殿下がやり過ぎとばかりにソフィア様をお守りしていたからなのでしょう。だから、あのクロード陛下の妻などに簡単になってしまったんでしょうね。もう少し、そういった方面に敏ければ……と思わなくもないのですが、今はクロード陛下の隣りで幸せそうなのですから、私はその笑顔を見ることができればそれでよいでしょう。
ソフィア様の横顔を拝見しながら考え事をしていると扉をノックする音。そして返事をする間もなく開く扉。誰がやってきたのかなど、すぐにわかる。
ソフィア様が報告書から顔を上げ眩いばかりの笑顔を作る。私はさっと立ち上がり一礼した。

「陛下！」

ソフィア様が嬉しそうに呼びかけているというのに、その相手ときたら眉間に皺をよせ難しい顔をしている。きっと髪飾りに気が付いているのだろう。

「来ていたのか、エドワール。王妃の私室に入り込むなど、お前出なければ許さないんだがな……。用事は済んだのか？」

挨拶もおざなりに陛下が私を追い出そうとする。以前、有無を言わさず追い出されたことがある。しかし、すぐにソフィア様が駆けつけてくださった。その後をついてくるように陛下もやってきたが。あの時の私を憎々しげに見やる顔と言ったらない。ソフィア様にとって陛下は特別な人なのだろうが、私だってそれなりに大切にされ

ているのだと少しだけ溜飲が下がった気がした。
「もう少しお時間をいただいても？」
「ソフィア、これは？」
私の答えなど元から望んでいなかったのであろうクロード陛下はさっさと次の質問をソフィア様に投げかける。
「エドワールにいただいたの。どうかしら？」
「ああ、良く似合ってる」
ほほ笑みながらクロード陛下を見上げてそう仰るソフィア様。とても気に入ってくださっているようで、嬉しくなる。陛下は素直に認めてソフィア様の髪をなでながら髪飾りに触れ眉をひそめる。
「しかし、感心しないな。夫の前で他の男からもらったものを身につけるなんて」
「あっ……」
「それに、こんなにきっちり結わなくていい」
「ピンを抜いてはダメです。クロード様」
「この後、何かあるのか？　確か聞いたところによると何もないとのことだったが」
「ですけれど、髪をおろすのは淑女のモラルに」
「私といる時、それは忘れる約束だ。それとも夫に秘密の用事でも？」
「そんなものありません！　クロード様が来て下さるのを待っていました」
「それは嬉しいことを言ってくれる」
目の前で繰り広げられる甘いやり取り。私や侍女がいることなど

お構いなしだ。いや、クロード陛下は傍観者がいると見せつけるような行動を取る傾向にある。わかってやっているはずだ。ソフィア様がどんな顔をしているかは陛下の影になっていてよくわからない。それもまた計算のうちなのだろう。

「本当です」
「もちろん疑ってなどいないさ。あなたに会うために公務を片付けた私の願いを聞いてくれる？」
「どんなお願いごとですか？」
「今日は髪をおろして、私と過ごしてほしい」
「……もう」
「私の願いは叶えてもらえるのかな」
「もちろんです」
「では、私がこのピンを抜く大役を買って出よう」

陛下は私の贈った髪飾りをさっさと外してテーブルに置くと、ソフィア様がソファに座っているのをいいことにどんどん髪を結えているピンを抜いてテーブルの上に放り投げている。

「よし、これでいい」
「クロード様……」
「こっちの方がよく似合ってる」
「本当？」
「ああ」
「嬉しいです」
「だが、髪を上げている時のあなたの項を眺めるのも私は好きだけれど」
「きゃっ」
「他の男には触れさせないように」
「もちろんです」

「それなら安心だ」
「クロード様も他の女性に触れてはダメです」
ソフィア様の甘えるような発言にクロード陛下が息を飲むのがわかった。だが、これには私も虚を衝かれた。ソフィア様がこのようなことを言っているのは初めて聞いた。
「もちろんだ。他の女性など触れたいとも思わない」
それまで私からソフィア様を隠すように立ちはだかっていた陛下がソフィア様の隣りに腰を下ろす。それまでゆっくりとソフィア様の髪を梳いていた陛下の手がソフィア様の顔に触れる。
ああ。これは。
報告書の質疑を再開などさせていただけないだろう。私は仕方なく立ち上がるとアリスとともに静かに部屋を後にした。
「私が触れたいのはあなただけだ」
「わたしも……んっ……あなただけ……っ」

XX　THE　OTHER　SIDE　03（後書き）

逃げ遅れた元執事。
二人が何をしているのかはみんなの想像にお任せ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5632r/

返却を希望します

2011年3月27日20時23分発行